

仕事を学ぶ 林業をつなぐ

未来の担い手を育てよう
林業就業促進活動事例集



全国林業研究グループ連絡協議会

仕事を学ぶ 林業をつなぐ

未来の担い手を育てよう

林業就業促進活動事例集



全国林業研究グループ連絡協議会

2 021年3月頃から昨年にかけてウッドショックが日本を揺るがせてきました。さらに2022年、ロシアのウクライナ

侵攻や円安などの情勢も重なり木材輸入が不安定になり、住宅産業をはじめ木材に関わる様々な産業に大きな影響をもたらしました。

このことから、外材依存によるリスク回避を図るため国産材への期待が高まり、林業の存在が改めてクローズアップされてきています。ところが、林業現場では人材不足が深刻になってきており、林業を担う若者の確保・育成は大きな課題となっています。

そのようななか、私たち全国の林業研究グループメンバーが、いかに地域の若者たちに林業を知ってもらい、仕事として認識してもらえるように働きかけていくかが重要になると考えます。林業の仕事の魅力を伝え、就業希望者のすそ野を広げ、現場での技術指導等を通じて林業教育を支援するなど、私たち林研グループだからこそできる様々な活動があります。

このたび、これからの林業を支える人材育成に寄与するため、一丸となって多様な担い手育成事業を推進する運動を繰り広げてきました。地域の林業後継者や将来を担う未来の就業者、新たに林業に就業したい人々、そして女性に向けた様々な支援活動です。

今年度もコロナ禍にあつて条件の制約はありましたが、高校生や大学生など若い層を対象としたインターンシップ、林業経営・就業体験、林業技術研修などを実践してきました。そして地域の林業全般に関わる業種に触れ、就業先の選択肢の1つとして林業という仕事の魅力を心に刻んでもらうことができました。

また、女性の林業就業を支援する活動も全国に広がりました。体

方面での男女差を考慮するなかで、林研グループの活動から、安全に、無理なく働ける就業環境づくりの工夫やアイデアが生まれ、男女共通の魅力ある職場づくりに寄与する成果も生まれています。

このような全国での支援活動は、私たちの仲間だけで実行できるものではありません。高校や大学等、地域の教育関係者、そして技術指導などを支援する林業関係者の方々の理解と協力を得て、はじめて効果のある活動づくりが可能になります。

本書は、後継者の育成支援、林業就業促進支援等はもちろん、林研グループ等の活動、さらには地域の仕事創出支援に欠かせない生産技術や流通・販売ノウハウ等を実践事例から紹介しました。

机上では得られない実践のためのノウハウ、ヒントの数々が盛り込まれています。地域での林業後継者づくりにつなげるためにも、地域の教育機関とも連携した活動に、ぜひ本書を役立てていただければ幸いです。

本書の取りまとめに当たりましては、コロナ禍でご苦労しながらご協力いただきました林業関係高校、大学や大学校等教育機関、都道府県林業普及指導員、市町村、森林組合、森林所有者のみなさん、全国林業改良普及協会ほか、大勢の方々に深く感謝いたします。

令和5年3月

全国林業研究グループ連絡協議会

会長 齋藤 正

まえがき…………… 3

第1部 森林と林業の仕事伝える 高校生等の林業就業促進現地活動

人と山をつなぎ直す

— 工業高校生、小学生を対象に林業体験

津山町林業研究会〔宮城県〕…………… 8

林業を次世代につなぐ

大学生の里山林整備体験講座

今市里山育成会〔栃木県〕…………… 12

林分を観察して林業を理解する

埼玉県森林協会林業研究グループ部会〔埼玉県〕…………… 16

受講生が指導者に

17年続く後継者養成の取り組み

北信州の森林と家をつなぐ会〔長野県〕…………… 20

川上から川下まで、伐採から製材まで

一連の仕事を学ぶ体験研修

熊野林屋会〔三重県〕…………… 24

森林・林業への関心・就業促進に向けた

県内2校のインターンシップ

山口県林業研究グループ連絡協議会〔山口県〕…………… 28

町や県と連係した
息の長い後継者育成活動を
かみやま林業振興会「徳島県」……………32

高校生36名全員がチェインソー体験！
— 森林・林業の仕事に興味を持ってほしい
— 京都森林研究グループ「福岡県」……………36

林業技術・鳥獣被害対策研修で
地域の魅力や課題を共有する
芦北地域林業研究グループ「熊本県」……………40

継続でつなぐ林業体験研修
高校生に架ける林業への橋
門川町林業研究グループ連絡協議会「宮崎県」……………44

第2部 山づくり 人づくり ものづくり チャレンジ！

ニホンジカとの知恵比べ
竹と防風ネットで柵作り
こまゆみ遊林会「長野県」……………50

地「元産苗木の生産
多賀町林業研究グループ「滋賀県」……………52

何度も災害を乗り越えて。
ブランド「野迫川沢ワサビ」
野迫川村林業研究会「奈良県」……………54

林業と木育
2本柱で活動復活！
嘉麻市林業研究会「福岡県」……………56

「柿の葉茶づくり」で
心も体も健やかに

美祢あさぎり会「山口県」……………58

オニグルミシロップづくり

村岡林業研究グループ「兵庫県」……………60

小学生向け

森林・林業体験学習

大井川地区林業研究協議会「静岡県」……………62

盆栽で樹木の生理を学び、

林業に生かす

金沢市林業研究会「石川県」／紙谷拓志さん……………64

「お試し林研」で仲間を増やす

〈未来から今何をするべきかを見つめる〉

群馬県林業研究グループ連絡協議会「群馬県」……………66

所有者と協定を結び、

里山を再生

庫富林業グループ「北海道」……………68

森林・林業を次世代に。

私たちの「ミスター林研」

日高川町林業研究会「和歌山県」／小早川真さん……………70

きのこで森の循環を！

オオイチヨウタケ栽培

盛岡広域森林組合青年部「岩手県」……………72

巻末資料

林業で働くために……………76

森林・林業に関する学科・科目設置校一覧表（林業大学校・短期大学等）……………78

令和4年度未来の林業を支える林業後継者養成事業 実施グループ一覧……………79

全国林業研究グループ連絡協議会 事務局一覧……………81



第1部 森林と林業の 仕事を伝える

高校生等の林業就業促進現地活動

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

人と山をつなぎ直す —工業高校生、小学生を対象に林業体験

津山町林業研究会「宮城県」



シカ害防除のネットを張る高校生

木工芸の里づくりを進める町で

津山町林業研究会（佐々木好博

会長 以下、津山町林研）が活動する登米市津山町は宮城県の北東部にあり、面積の82%が森林です。

北上山系の山並みと雄大な流れの北上川を有する人口3000人の町です。

津山町は古くから積極的に造林が進められ、人工林率は77%で、そのうち93%をスギが占める産地です。また、津山町はスギの素材生産にとどまらず、津山木材センターや製材所が多く立地するほか、津山工芸品事業協同組合、津山小径木加工組合、津山町木炭生産組合など木材を加工する組合も多く、林業・木材産業が地域の基幹産業となっています。

また、木工芸の里づくりを進めており、その拠点として国道45号線沿いには、林産物の展示販売などを行う「もくもくハウス」などがあり、道の駅「津山もくもくランド」の誕生へとつながりました。



道の駅「津山もくもくランド」

次世代へ森林文化をつなぐ

津山町林研の会員数は現在14名。熱心な森林所有者のほかに、伐採搬出業者や森林組合職員、木炭生産者、木工職人、農協職員等の加工流通関係者が加わって、木に携わる人たちの情報交換や会員相互の親睦が進んでいます。



ワサビの栽培体験（横山小学校3年生）



炭焼き体験（柳津小学校、横山小学校5年生）

この間、植林や下刈り、間伐などの施業や木材の加工・利用を地域の森林文化としてとらえ次世代につなげるために、高校生や小学生の林業体験、市民参加の森林づくりに積極的に取り組んでいます。

津山町林研の佐々木好博会長は「現在は都会だけでなく私たちが住むような山間地でも、『心も生活も』人と山が『未だに絆が失わ

れたまま』の状態だと感じています。大人を含め、子どもたちも触れ合う機会を無くしてしまい、それが、山をはじめとした地域の荒廃、につながってしまったのだと思います。自分たちがどんな環境で暮らしているのか理解する機会すら失われています。私たちが行っている林業体験は、そんな失われてしまった山との絆を取り戻す1つのキッカケになって欲しい

と考えています」と言います。令和4年は、県立古川工業高等学校（以下、古川工業高校）建築科の1年生を対象に、7月に花粉症対策スギなどの特別講義を、12月に植林とシカ害防除の林業体験を行いました。また3年生の建築科芸班は8月に木工房体験も行いました。平成20年から15年続いている取り組みです。

一方、地元の小学生を対象にした林業体験は平成8年からで、27年間も続いています。令和4年は、4月に横山小学校6年生16名を対象にした植林体験、5月に横山小学校の3年生6名を対象にしたワサビ栽培体験、そして11月に柳津小学校、横山小学校の5年生15名を対象にした炭焼き体験を行いました（この柳津小学校、横山小学校は令和5年に統合されます）。

スギ苗木の植林やシカ害防除の林業体験

古川工業高校建築科の林業体験は、「21世紀を迎え、環境や資源の有限性が認識され、循環型社会の構築が求められる中、森林の国土保全や地球温暖化防止などの多面的機能を理解し、森林資源を適切に整備しながら循環的に利用していくことを理解させる」ことが目的で、建築科の1年生を対象に年に2回開かれています。

主催は同校建築科ですが、津山町林研を中心に津山町森林組合、登米市、宮城県東部地方振興事務所登米地域事務所が協力するという形で実施されました。

1回目は7月13日（水）です。



7月の林業体験で行われたドローン撮影

12月の林業体験は9日（金）で、夏にできなかった植林と同時に、植林木の1本1本にネットを被せる単木防除も行うことになりました。津山町近辺ではこの4〜5年シカの被害が増えてきているのです。

宮城県林業技術総合センターの佐々木周一さんは「原発禍と高齢化のせいで狩猟圧が弱まり、かつ食べ物が豊富になったので、生息

域を拡大しているのだと思います」と言います。

工業高校建築科の生徒40名が参加

9日当日は、古川工業高校建築科1年の生徒40名（男子20名、女子20名）に引率教諭2名、そして指導役の津山町林研、登米市・宮城県の職員が加わって、総勢50名近い人数となりました。集合場所は国道45号線沿いにある道の駅「津山もくもくランド」です。

朝9時過ぎ、生徒たちを乗せた



コンテナ苗の植林

バス2台が到着。トイレ休憩をはさんで開会式を終えると、バスで10分ほどの現地に向かいました。山は分収造林が伐期を迎えたことから皆伐して間もない市有林です。一部ではすでに植林を終えていました。12月に入っているのですが、天候は快晴。絶好の作業日和です。

最初に生徒たちは、前半に植林をし後半に防除をする班と、前半に防除をし後半に植林をする班の2班に分かれました。津山町林研の佐々木寿光さんが、植林や単木防除についてその手順や道具の使い方について説明した後、実際の作業に入って行きましたが、引率の先生方や県職員などの方々が個別に指導、アドバイスをしました。

植林のほうは、あらかじめ印を付けていた箇所、植え穴器などを差し込み、その跡にスギのコンテナ苗を入れ込んで踏み固めます。

従来の植栽方法に比べるとずいぶん手軽になったものです。1人で10本ほどの苗木を植えました。

「傾斜地で足下も悪いのでちよつと大変」と話す生徒もいましたが、和気あいあいとやっている生徒、ときに1人で慎重に植えている生徒などが目につきました。なお、このスギは花粉症対策の一環として育てられた苗

当初の予定では、津山町の山林で約500本の花粉症対策スギの苗木を植林する予定でしたが、当日はあいにくの雨となって中止。会場を津山木材センターに移して、「花粉症対策スギ」「獣害対策」「林業のIT化」についての特別授業を行いました。

「室内の講義が多かったせいか、生徒の皆さんには林業のIT化の一環で行ったドローン操作が好評でした」と津山町林研の事務局長を務めている佐々木寿光さんは話します。



市有林で植林とシカ害防除

「津山町林業研究会様には、毎年ご多忙中にもかかわらず林業体験実習の場を設けていただき、ま

てくれました。大半は県内外の建築会社、建設会社です。古川工業高校建築科の只野悟教諭は今回の林業体験について、次のように語ってくれました。

「津山町林業研究会様には、毎年ご多忙中にもかかわらず林業体験実習の場を設けていただき、ま

「津山町林業研究会様には、毎年ご多忙中にもかかわらず林業体験実習の場を設けていただき、ま

将来は林業体験実習での経験を

*まとめ 編集部

です。一方、植林木にネットを被せる単木防除のほうは、まず下穴を開けてから支柱などを立てます。それからネットを被せクリップで固定して行きますが、その際に山側、谷側の位置を確認してゆく必要があります。慣れないうちはそれがちよつと面倒なようでした。

これら作業は10時頃から始めて約1時間半ほどで終わりました。最後は質問タイムです。「植物の成長に対して寒暖差はどのような影響を与えるか」、「シカの単木防除資材を設置するのにコストはどれくらいかかるか」「単木防除資材は、つけたままにしておいていいのか」などの質問が生徒から出されました。

古川工業高校建築科の生徒の過去5年間の進路状況を見ると、毎年の卒業生40名ほどのうち約6割が就職、残り4割が大学、専門学校などの進学になっています。就職先は農協、病院、木材会社などもあります。大半は県内外の建築会社、建設会社です。



作業を終えた高校生の集合写真

林業体験を生かして木材を活かす建築技術者へ

古川工業高校建築科の生徒の過去5年間の進路状況を見ると、毎年の卒業生40名ほどのうち約6割が就職、残り4割が大学、専門学校などの進学になっています。就職先は農協、病院、木材会社などもあります。大半は県内外の建築会社、建設会社です。

生かし、木材を無駄なく大切に利用して、自分が手掛けた建築物を利用する皆さんに喜ばれる仕事ができる建築技術者に育ってほしいことを願っております。そして、いつの日か、これまで津山町林業研究会様にお世話になった生徒の中から、林業の仕事に携わってくれる人材が出てほしいと考えております」

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

林業を次世代につなぐ 大学生の里山林整備体験講座 今市里山育成会「栃木県」



里山林の整備で広葉樹の枝下ろし作業をする学生たち

活動地域、グループの概要

今市里山育成会（以下、当会）が活動する栃木県日光市

は、県北西部に位置する人口約7万6000人の市です。平成18年度に2市2町1村が合併して、

市の面積は栃木県の4分の1を占める約14万5000haと全国でも3番目に大きな市となっています。森林面積は約12万5000ha、森林率は86%で、多くが日光国立公園に指定される自然豊かな地域ですが、民有林の人工林率は53%と、古くから「日光材」の産地として知られる林業が盛んな地域でもあります。近年は、地域の製材事業者や森林組合等が協力して森林認証材などの「日光の木」のブランド化に取り組んでいます。当会は、平成の市町村合併前の旧・今市林業振興会の会員を中心とし、平成21年から里山保全の活動を開始しました。発足のきっかけは、林業関係者の高齢化など、将来の林業経営の継承に懸念を感じた中で、ベテラン会員の発した「後継者を育てなくてはしゃーね

かんべ」の一言でした。

発足当初は、地元小学校の生徒を対象とした「森林・林業教室」、森林所有者の後継者を対象とした「里山づくり体験講座」の開催を主な活動内容とし、会員の技術の向上のための研修会なども開催してきました。

本事業への取組経緯 体験講座に大学生を

「里山づくり体験講座」は、当初は地域の森林所有者の子どもや孫を対象に参加者を募集してきました。しかし、林業以外に仕事を持つ若い世代は現在従事している仕事で手いっぱいな状況で、継続的に林業活動に参加するのが難しい様子が見られました。

一方、定年退職後に林業に関わろうという参加者があって、こう

した年代の方とともに後継者育成活動を進めて来たところです。

体験講座の参加者に大学生が加わったのは、平成27年度からで、この時の内容は、集中豪雨災害で崩壊した山林の斜面の復旧に広葉樹を植栽するものでした

この活動は、地域の方の関心も高く、いろいろな年代の方が参加してくれました。また、宇都宮大学農学部森林科学科の学生に案内を出したところ多数の応募があり、学生もこのようなフィールドを求めていることがわかりましたので、その後は同学科学生を中心に継続して開催しています。

農山村暮らしを知らない学生たち

それからは、間伐の選木や伐倒作業、チェーンソーの使い方、スギや広葉樹の植え付け、下刈り、枝打ち等の作業を内容としてきました。学生との交流の中で意外に感じたことは、森林科学科の学生であつても多くが町暮らしで農山村の暮らしを知らなかったことです。文献で読んだ里山林関係の用語なども、その実際に理解が追いついていないという女子学生の話もあり、林家ステイも関連付けて実施しました。素の林家の生活に触れて、学生の理解も深まったと感じています。

令和2・3年度については、コロナウイルス感染症拡大の影響から研修会等の活動を中止することとなり、会員の集まる機会も少なくなつてしまいました。

令和4年度に再開するにあつて、応募申込があるか心配されましたが、実施時には計画していた学生数10名を確保したほか、一般の参加者もあり、当初の計画以上の参加者数となりました。

広葉樹植栽地での枝下ろし、下刈り作業

当年度の活動内容は、会の活動で管理している広葉樹植栽地での枝下ろし、下刈りの作業と、会員所有のヒノキ林の枝下ろし作業、里山林管理に関する座学の組み合わせで行いました。

午前の部の広葉樹の現場は、元は風倒害を受けたスギ林の伐採跡地で、県道のバイパス道に隣接する平地林です。人通りが多い場所



会員手作りの料理を持ち寄り一緒にお昼をいただく。
森林所有者と大学生との意見交換の時間も楽しみのひとつ

なので、サクラなどの広葉樹を植栽し、里山の景観として道行く人に季節の光景を楽しんでもらうことを目的に整備しています。

学生の中には、演習林の実習などでスギやヒノキの木材生産を経験したことのある方もいますが、今回のように広葉樹が対象で、造園的な観点から管理する枝下ろし

や下刈りの作業は初めてとなり、新鮮に感じられたようです。

この後の座学では、里山林の広葉樹の活用について書籍も出版している県のベテラン林業普及指導員の方を講師として、里山林管理の歴史的な背景や、里山に自生する多様な植物の活用方法などを学びました。里山に自生する植物の



宇都宮大学農学部森林科学科の学生たちと会員たち

中には、花き市場へ出荷してみると意外な値段で取り引きされる事例があるなどが紹介され、里山林の保全が経済的にも成立する可能性を持つことも学べたことと思います。

研修会の昼食は、現地で会員の手作りの料理を持ち寄り、地域の公民館に併設された農村レス

トランで、会員と学生とが意見交換をしながら食べることを恒例としています。

大学の講義や実習では味わえない

今回の体験講座には、学生以外に自伐林家の方や林業事業体に所属する若い方の参加があり、意見

交換の時間は地域の林業活動の様子を知る良い機会になりました。

午後の部では、会員の育成している若齢ヒノキ林の枝打ちの作業を行いました。無節材といった木材の利用方法を見据えた育成管理や、枝打ち箇所周辺の材の成長を考えると、枝打ち作業となりました。

1日に複数の箇所を巡りながらの講座となったため、実技で体験できるそれぞれの作業量は、学生の皆さんには物足りなかつたかもしれませんが、大学の講義・実習では扱わない内容を取り上げたり、森林所有者や林業従事者とも交流を持つ機会となったことが、当会で研修事業を開催する意義でもあると思います。

今までの取組活動から

これまでの活動の中で、印象深い取り組みについて紹介します。

平成29年度は間伐作業とチェーンソーの取り扱いを内容としました。チェーンソー作業は事故の危険が伴うので、まず室内で座学を行ってから、現場体験を実施しました。講師には、林業・木材製造業労働



平成29年度 チェーンソーの取り扱いについて座学を実施



チェーンソー伐倒の現地実習

災害防止協会栃木県支部から指導員の方を紹介していただきました。学生たちのほとんどがチェーンソーの扱いは初めてだったので、一から手取り足取りで操作を学んでいきました。伐倒した間伐木が



平成30年度 寝転んでスギ林の間伐木の選木中

問4の『将来どのような事に就きたいか』では、回答の多い順に、「公務員」「林業会社の職員」「森林組合等の職員」となっており、卒業後

問3の『研修受講後に林業に係わる仕事に就きたいと思ったか』の回答数は、回答数はわずかですが、「ある程度そう思った」の回答が得られました。

問4の『将来どのような事に就きたいか』では、回答の多い順に、「公務員」「林業会社の職員」「森林組合等の職員」となっており、卒業後

アンケートによる 学生と関係者等の反応

研修会参加者の宇都宮大学の学生の進路は、およそ4割が公務員・農林業関連団体、4割が民間会社

かり木になって、ロープや滑車を
使って皆で力を合わせて作業し、
伐倒した時にはとても満足そうな
様子でした。

（農林関係コンサルタント、木材
流通・建設関係等が主）、2割が
進学・その他、という傾向になっ
ています（表）。

研修時に行った参加者アンケー
トの結果を見ると、

問1『入学前に林業について知
っていたか』では、「十分知って
いた」「ある程度知っていた」が
6割を占め、問2『今回の研修前
に林業に係わる仕事に就きたいと
思っていたか』では、「思っていた」

「ある程度思っていた」の回答が
9割となっています。学生の森林・
林業分野への就業意向については、
森林科学専攻なので、入学時から
もともと高い状況があると思
われます。

表 宇都宮大学農学部森林科学科学部生の就職先

区分	R1	R2	R3	R1-R3 合計	割合
公務員	10	8	20	38	37%
農林業関連団体職員	3	2	1	6	6%
民間会社	13	16	9	38	37%
進学	4	2	3	9	9%
その他	3	6	3	12	12%
合計	33	34	36	103	

の就職先と同様の傾向となってい
ました。

問5『林業に関わる仕事に就き
たくない理由』の回答は、「山仕
事はきつそうだから」でした。

問6『研修が役に立ったか』、

問7『研修が理解できたか』につ
いては、ほぼ全ての回答が「ある
程度役に立った」「ある程度理解

日光の美しい里山を 後継者につなぐ

できた」以上の結果となり、研修
会を開催している側としてうれし
い結果が得られました。

里山は、多くの小規模所有者で
成り立っており、個人の中小面積
の林業では自立的な施業・経営は
難しく、林業経営に魅力を感じな
くなっているかもしれません。そ
れでも地域の山林が荒廃せずに、
多くの人が里山や山村に魅力を感じられるように、私たち所有者は、
地域で協力しながら保全に努め、
先人が築いてきた里山の財産をこ
れからの後継者につないで行きた
いと考えています。そして、観光
都市日光を彩る美しい里山を残し
ていくことが、私たちの願いです。
また、後継者育成の活動を通じ
て、若い人たちに当地域の保全に
協力してもらおうとともに、将来、
森林・林業の分野で活躍してもら
えることを願っています。

*まとめ

今市里山育成会

代表 大嶋久美子

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例



秋晴れの下、生徒30名が参加しインターンシップを実施

林分を観察して林業を理解する

埼玉県森林協会林業研究グループ部会「埼玉県」

埼玉県森林協会・林業研究グループ部会（以下、林研部会）は、県内の林業研究グループ9団体で組織され、田島哲也代表のもと会員は304名、うち男性220名女性84名を数えます。全国的な傾向と同じく会員の減少と高齢化が進みますが、特用林産品の開発・販売に取り組む女性グループの活動が活発で、森林所有者以外の若い人の参加もわずかながら増えています。

林研部会の活動の1つとして、県立秩父農工科学高等学校森林科学科高校生へのインターンシップを行っています。県立高校なので地域の林研グループではなく、県レベルの林研部会で取り組むことにしました。平成15年、井上淳治会長の下でスタートしそれ以降、井上さんを中心に20年間続けてき

ました。

森林科学科 インターンシップ

「何もたいしたことはしていないよ。ただ山を歩くだけだ」との言葉どおり、同校へのインターンシップでは、井上さんが所有する樹齢30～170年の山林を観察しながら2時間ほど歩いて巡ります。今年度は10月27日（木）に森林科学科1年生30名が参加して実施しました。生徒は2台のバスに分乗し、学校から約40分かけ午後1時に飯能市東吾野ひがしあがのに到着。整列して挨拶を交わしたあと、秋晴れの下、林内を歩き始めました。

「この木は何の木かわかりますか？」。井上さんは質問形式をとりながら、できるだけ平易な言葉で語りかけます。スギとヒノキの



井上淳治さん。
座っているイスとテーブルは西川材を使用している

違いを葉っぱや幹を比べながら説明。そして「同じスギでもこっちにあるのは鹿児島県のイッポンスギという品種です」と話をつなげます。「30年くらい前に林研の仲間と鹿児島県に視察に行ったとき、真つすぐに伸びて枝が太くないスギを見て、大変良い木だと思ったので苗を分けてもらい植林しました」。

隣のスギ林と比較しながら違いを見つめようと身を乗り出す生徒。

「この品種がこの地に合っているかどうか、結果が出るのは50〜60年後になるから、答え合わせができるのは一生に1回です」。これを聞いて十代の生徒たちの感覚が木の時間軸へと動き始めました。

案内するのは江戸時代から続く林家

案内する井上さんが暮らす飯能市は埼玉県南西部に位置し、都心から40〜60kmという近さながら

自然豊かな地です。林業地としての歴史は古く、材は筏に組んで入間川、高麗川、越辺川から荒川を経て千住や深川へと運びました。江戸から見て西の川から流れてくるので西川材と呼ばれ、集約的施策による優良材生産が特徴で、目の詰まった美しいスギとヒノキの木材が町屋や家具になって江戸・東京の暮らしを支えました。

井上さんはこの地に江戸時代から続く林家。大学卒業後20代で稼業に入り、平成9年には一般の人が木工体験できる工房をオープンさせ、1人でも多くの人に木の良さを知ってもらい木材需要を高めようと、アイデアを練った事業を展開してきました。

また業界や地域を盛り上げようと、さまざまな林業関連団体の役に就き「自分の商売が手薄になっているんだよ」と苦笑しながらも、60代の今も寸暇を惜しむような働きぶりです。貴重な時間を割いてでも高校生へのインターシップを続けているのは、自分が受け継いだ伝統を若い世代に引き継ぎたいと願うからです。

目で見て林分を比較する

間伐の終わった美しい林内で、木漏れ日を浴びながら生徒たちは歩を進めます。

挿し木苗の林分は木の大きさが揃っていて、実生苗は成長にばらつきがあること。同じ樹齢でも幹の樹皮が開いているのか真つすぐかで成長の良し悪しが判断できることなど、生徒たちは解説を聴いてじっくり観察していきます。

ヒノキ林では、たまたま枝打ち用のムカデ梯子が置いてあったので、使い方を実演。地上3m、井上さんの軽々とした身のこなしから地道な枝打ち作業を繰り返してきることが伝わります。

続いて細い木と太い木を見て「どちらの値段が高いでしょうか?」という問いかけに。

生徒は「目が詰まっているから細い木」と答えましたが、実際には太い木のほうが高く売れます。「いまは良い木が評価されない時代なんだよ」と。そして「皆さんの家を考えてもらえ。天井や床に木が使われていますか?」と問い



スギ挿し木苗の林分を観察する生徒



かけます。良材だけでなく木そのものが生活に使われなくなり、生徒たちは林業が直面する問題を感じたようでした。

理解しやすい話し方を工夫

井上さんは、どう話したら理解してもらえるだろうと、ずっと考えながら歩いています。おしゃべりしたりふざけた態度の生徒は

年々減り真面目になつてはいるが、反応が薄くなってきたとも感じます。生徒のほうから質問が出てくるのが理想ですが、せめて一方的な解説にならないようクイズ形式にするなど工夫をしています。

また、水源涵養や環境保全など森林のもつ多面的機能については敢えて触れず、林業そのものの特化し、理解が薄まらないようにと意識しています。



枝打ちされた美しいヒノキ林の前に「良い木が評価されない時代」という話を聞く生徒

ムカデ梯子の使い方を実演する井上さん



樹齢約170年のスギ林に圧倒された生徒たちは、井上さんの話に耳を傾けた

「いま林業や木材関連の求人が少ないけど、たとえ数人でも卒業生が就職したと聞くと本当に嬉しいね」と。

江戸時代に植えられたスギ林に圧倒される

この日最後にたどり着いたのが約170年生の林分。静寂の中、すくつと立ち並ぶスギの迫力に生徒は圧倒されています。

「皆さんはジャケットやズボン、それに機能的な靴を履いています。当時の人はどんな物を着て山仕事をしていたと思いますか？」と井上さんは想像力を誘います。江戸末期にあたる天保年代は災害や飢饉に苦しみ、世の中が大きく変わろうとしていた時代。その時を生きた人が植えた木なのだ、話を聞きながら実感がわいてきた生徒に、「こんな壮大な仕事、ほかにありますか」。真剣な目で見つめる生徒たちに「どんなふう考えて植えたのか、どう手入れをしてきたのか、時代を遡るのが林業の魅力なんです」と語りかけます。

林業の基本を伝えつづけたい

午後の授業時間を使ったインターシップは最初に井上さんが述べたとおり本当に山を歩くだけでした。しかし生徒たちには、景色として見ていた森林が、価値をもった1本1本の木として見え始め、林業の基本中の基本を学ぶ体験になりました。

締めくくりに井上さんは「皆さんが3年間勉強してみても興味をもつたら、どうか木にかかわる仕事をしてください」と語りかけました。林研部会として20年間にわたり実施してきたインターシップ。しかし経費は生徒の移動用バスのレンタル代を引くと赤字で、「仕方ないから、来年からは俺のほうから学校に向いて授業しようと考えてるところなんだ。林分を見ながら学ぶのが一番だけだな」と。多忙な仕事との調整や経費の工夫など、今後のやり方を試案中ですが、続けられる限り続けようと考えています。

*まとめ 編集部

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

受講生が指導者に 17年続く後継者養成の取り組み

北信州の森林と家をつなぐ会「長野県」



3年生のフォワーダによる丸太積み込みと荷下ろし作業を指導する同校の先輩

地域材普及と
後継者養成をめざす

北信州の森林と家をつなぐ会

(以下、当会)は、林業者、製材業者、工務店、設計士などにより地域材普及を目的として平成14年

に発足しました。地域の林業団体である高水林業協議会の林業グループ部に所属する林研グループです。

当会では、平成18年度に始まった「吸収源対策森林施業推進活動緊急支援事業」の「林業後継者育成・確保支援事業」を、林業科のあった県下4高校の1つで木島平村にある県立下高井農林高等学校(以下、下高井農林高校)で実施してから、同校生徒を対象とした後継者養成事業が今年で17年目となります。

現在に至るまで、担当する先生が変わることもあり、取組内容も大きく変わってきました。当初は間伐実習、ログハウス製作、炭焼き、ブナ林学習会を行いました。その後、高性能林業機械研修が加わるなどしました。

下高井農林高校ではそれから1年時は総合的な教育を行い、2年時で2科に分かれ、3年時でコース選択をするという制度になりました。それに合わせて、本事業でも1年時には科を選択するために地域の森林・林業を知る研修を、2年時にはコース選択のため

森林・林業の最新事情の研修をし、3年時にはコース選択した生徒に演習的な研修をと、学年に合わせて内容を工夫してきました。生徒たちに森林・林業の仕事に関心をもってもらえる研修をめざしていきます。

**取組状況にも
臨機応変に対処**

ただ、事業申請しても助成金が満額受けられる訳ではありませんので、そうした事情も考慮して実

施しています。

毎年度、取り組みへの要望申請を行うに当たり、高校に伺って担当の先生と事業について相談を行います。県の出先機関の担当にも同席をお願いしていますが、基本的には当会が主となって話を進めています。

今年度は、先生がかつてこの事業に生徒として参加したことがあり、ブナ林学習が一番印象に残っていたので、ぜひ研修に加えて欲しいという要望があり、ブナ林学習を加えて申請しました。しかし、受理されるのは難しいようでしたので、再度、学校と相談。当初1年生48名を対象としていたブナ林学習を2年生24名を対象にし、1年生にはドローン研修を行うように変更しました。

交付決定後は、学校で日程調整を行い事業実行に移ります。夏休み明けの9月5日(月)からの開始となりましたが、今度は学校のマイクローパスが故障で使えないという問題が出てきました。これについては、昨年から学校の

ある木島平村で人的・物的な協力を

を行っていたいていただきましたので、役場の方で対応くださり、おかげで無事に事業を進めることができました。

3年生の体験

チェーンソーアート作り

最初に行ったのが、3年生がチェーンソーの取り扱いに慣れるた



チェーンソーアートで完成した作品を前に「万歳ポーズ！」



上手にチェーンソーを操作する女子生徒

めのチェーンソーアート作りです。チェーンソーアートのプロに指導をお願いして行いますが、会員も生徒が危険な行動をしないように注意を払って見守ります。始めのうち生徒は、腰を引いたぎこちない態勢でチェーンソーを使っていますが、昼頃になると慣れてきて、扱い方も見違えるようになりま

す。男子よりも上手に操作を行っている女子生徒もいました。この研修により、チェーンソーや林業に対しての怖さが薄れて、関心をもってもらえるのではと考えています。

スイングヤーダ、ハーベスタ、フォワーダ

3種類の高性能林業機械研修

次は高性能林業機械研修です。こちらも役場のマイクローパスで森林組合の間伐現場に行きました。作業道がドロドロで歩きにくい状況の中を現場に向かいました。3班に分かれて、スイングヤーダによる集材作業として機械の操縦と

荷かけ、ハーベスタを使っての造材作業、フォワーダでの丸太積み込みと荷下ろし作業を体験しました。

かつての受講生が指導者

この時の、フォワーダを指導してくれた森林組合職員は同校のOBであり、後継者養成事業の受講生でもあります。

前述した、生徒として参加した

ブナ林学習を要望した担当の先生もそうですが、長く続けていることで、受講生が指導者となるということが起きています。これもこの事業の成果であると感じています。

また、今年は操縦体験だけでなくハーベスタによる伐倒作業の見学も行いました。伐倒して造材するまでを30秒程度で行うことに、生徒たちは大変驚いていました。



ハーベスタによる伐倒作業を見学
伐倒から造材まで30秒程度に驚く生徒たち



ブナ林でインストラクターの説明を聴きながらメモをとる2年生

2年生のブナ林学習

次に行ったのが、2年生のブナ林学習です。飯山市の鍋倉山で行いました。指導を「なべくら高原森の家」のインストラクターにお願いました。こちらも移動は木島平村のマイクロバスで行っていただきました。鍋倉山のブナ林

では巨樹の「森太郎」が有名でしたが、残念ながら昨年の大雪で倒れてしまいました。しかし、残った根元部分を見てもその巨大さがわかり、生徒たちも驚くとともに、残念がっていました。

かつて北信地域はブナ材の生産地で、鉄道の駅には貯木場があり、その周辺には多くの製材所があり

ました。そうした地域林業の歴史に触れる研修でもありました。

1年生のドローン操縦 (ICT活用研修)

最後に行ったのが、1年生のドローン操縦（ICT活用研修）で

す。学校のグラウンドを使い4班に分かれて行いました。指導を森林組合にお願いし、ドローンも用意していただきました。

初めて体験する生徒たちがほとんどでしたので、最初はおそろその操作を行っていましたが、慣



4班に分かれてドローン操縦の指導を受ける1年生



慣れてくると夢中になってドローンを操縦

れてくると面白くなったようで夢中になって操縦していました。

継続は力なり

これらの体験で、1年生、2年生が林業に興味を持ち、3年時に森林活用コースを選択して林業を

ということです。その年よってバラつきはありませんが、この事業を継続して行うことが大切であると考えています。

＊まとめ

事務局長 田中 忠

選んでくれることを期待しています。研修アンケート結果では、3年生では林業・木材産業への就業を希望する生徒はいませんでした。2年生では6名、1年生では13名となっています。また、先生からは来年度の3年生の森林活用コース選択予定者が10名になるとも聞いています。

昨年の卒業生は、3年生の5名のうち、1名が森林組合に就職し、2名が長野県林業大学校に進学している

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

川上から川下まで、伐採から製材まで 一連の仕事を学ぶ体験研修 熊野林星会「三重県」



ヘルメットのバイザーを上げ真剣に選木する生徒

熊野の木のファンを
増やしたい！

熊野林星会（以下、当会）は、「地

域社会に貢献し、熊野の木のファンを増やそう」を理念に三重県熊野市を中心に活動している団体で

す。会員は、川上から川下までの関係者22名で構成しています。活動は、学生を対象とした林業体験研修の実施や、木の町熊野木工コンクルの開催のほか、三重大学と連携した木育プロジェクトの実施が中心です。

県立紀南高校 1年生への林業体験研修

当会では、高校生に森林の役割や地元の基幹産業である林業への理解を深めて、林業・木材産業分野への就業に繋げるため、林業体験研修を毎年実施しています。今年度は、三重県立紀南高等学校（以下、紀南高校）1年生に対し、林業体験研修を実施しましたので、この活動内容をご紹介します。

紀南高校では、毎年11月に1年生を対象とした進路探求の授業が

あります。内容は、林業コース、小売・販売コース、機械コース、進学コースの4コースの中から希望する1コースを選択する形となっており、今年度は、林業コースに7名が参加することになりました。

当会では、11月10日（木）の実施に向けて、会員間で複数回の打ち合わせを行いました。この中で、会員から「川上から川下までの仕事を一連で学んでもらったらどうか」「座学より体験研修、ゲームを取り入れたらどうか」「1人1本は、木を伐る体験をして欲しい」など様々な意見が出てきました。当会の会員は、素材生産業者、森林組合職員、原木市場・製材業者など多様なメンバーで構成されている強みもあり、1日で、伐採から製材までの一連を体験し、学

べる研修内容としました。研修内容は、以下のとおりです。

【午前】

① 伐木・造材作業体験

② 原木市場見学

【午後】

③ セーザイゲーム体験

④ 製材工場見学

当日は紀南高校に集合し、当会の活動を紹介した後、現地へ向かいました。移動中は、林業事業体、製材所など林業関連職場の仕事内容や木材流通の仕組み、ドローンを活用したスマート林業などについて説明しました。現地に到着後、2班に分かれて伐木・造材作業体験を実施しました。

木を伐る意義を
知ろう

① 伐木・造材作業体験

伐木・造材作業体験

は、熊野管内の林業事業体である株式会社眞



間伐の意義について講師の説明を受ける



立木の伐倒に挑戦！ 集中！

栄（以下、眞栄）の社有林で実施

しました。まず、眞栄の社員から、

間伐木の選木方法について説明を

受け、その後、選木を行いました。

生徒からは、「選木作業は、職

人になったようで面白い」「劣勢

木を見分けるのは難しい」「林内

から見上げる空は美しい」など、
様々な感想が聞かれました。

選木終了後、チェーンソーの取

り扱い方法や注意事項、伐倒方法、

安全装備などについての説明を受

け、眞栄の作業員による伐木・造

材のデモンストラーションを見学

した後、伐木・造材作業を体験し
ました。

生徒たちは、チェーンソーの操

作に悪戦苦闘しながら、眞栄の作

業員による丁寧な指導のもと、集

中して取り組んでいました。

また、生徒7名全員が、ほぼ狙

った方向に伐木することができ、当会で目標としていた「1人1本は、木を伐る体験をして欲しい」という当初の目標も達成することができました。一部の生徒は、自分で伐採・造材した材を輪切りにして持ち帰るなど、木材に対する愛着をもつてくれたようでした。

木材の流通を学ぼう

②原木市場見学

伐木・造材作業

体験終了後、熊野原木市場協同組合（以下、熊野原木）へ移動しました。熊野原木の工場において、当会員より、木材市場の業務内容、木材流通および木材価格について説明し、市場に出材されている原木を見学しました。

また、途中、木材価格クイズを行いました。これは、スギ、ヒノ



材の目利きを学ぶ

キの中目材（4m、20〜28cm）を数本選び、1m当たりの価格を予想するというものです。生徒たちは、事前に木材価格のポイントの説明を受けていたこともあり、実際に落札された価格に近い回答が多く出ました。生徒からは、「木材は意外と安いことがわかった」「節が多い丸太の価値が低いとい

うことがわかった」「元玉と2番玉の見分け方がわかった」など様々な感想が聞かれました。

また、生徒のなかには、1m当たりの価格を1本当たりの価格に計算し、「このスギは、1本2560円だ。これなら買えそう」など、物事を具体的に捉えており、感心させられました。

製材所を経営しよう

③セーザイゲーム体験

④製材所見学

伐木・造材作業

体験終了後、会議室へ移動し、セーザイゲーム体験を実施しました。セーザイゲームについて簡単に説明します。このゲームは、当会と三重大学が共同開発したもので、原木市場で重要となる「目利き」の要素や、製材業で重要である「木取り」を遊

びながら体験する「製材所経営シミュレーションゲーム」です。

また、ゲーム後に実際の現場を見学することによって、より深くその内容が理解できるプログラムとなっております。参加者は、製材所の経営者として、(1)丸太の仕入れ、(2)木取り（製材加工）、(3)販売（売上高の集計）などを疑似体験し、仕入れと販売の差である利益に応じた得点を競い合うというものです。



木取りに悪戦苦闘



木取りの成果を換金。仮想通貨も用意されている

様々な感想が聞
 くなった」など
 値がわかるよう
 た「丸太の価
 心理戦だと思っ
 りは、相手との
 と感じた」競
 奥深い仕事であ
 た「製材業は、
 ても楽しかつ
 ことができ、と
 通して製材のこ
 として製材のこ
 ことは、「ゲームを
 した。生徒から
 益を競い合いま
 売の差である利
 い、仕入れと販
 10回の競りを行った後、最後

生徒は、4チームに分かれ、ゲームに参加しました。はじめは、(1)丸太の仕入れです。当会員が競り子役を担い、スクリーンに丸太の写真を書し出し、競りを開始しました。生徒たちは、午前中に原木市場で学んだことを生かし、木材価格を決めていました。元玉の優良材には、応札が相次ぎ、会場内は大変盛り上がりしました。
 続いて、(2)木取り(製材加工)

です。落札した丸太(実際は丸太カード)の木取りをチーム内で行いました。木取りは、木製の木取りカードを丸太カードの上に置くというものです。生徒たちは、柱、床板などの木取りカードをどうすれば歩留まり良く、利益率良く、配置できるかを真剣に考えていました。
 10回の競りを行った後、最後に、(3)販売(売上高の集計)を行

かれました。
 ゲーム終了
 後、野地木材
 工業株式会社
 に移動し、実
 際の製材現場
 を見学しまし
 た。丸太から
 梁を製材して
 いる現場を見
 学した際には、
 生徒から「こ
 れは、元玉の
 優良材だ」「歩
 留まりはどれ
 くらいか」な
 ど専門的な用
 語や質問も飛
 びだし、事前
 にセーザイゲームで学んだことが
 生かされていると感じました。

林業への就業に向けて

今回の活動をとおして、地元の高校生に川上から川下までの一連の仕事を体験してもらえたこと、そして、多くの生徒から好評を得たことが大きな収穫となりました。また、当会の会員も研修の運営等



製材工場見学。セーザイゲーム体験後は丸太を見る目も違う!

に関わることで、会員間の団結力が高まるとともに、改めて地域林業への理解を深めることにも繋がっています。今後、1人でも多くの生徒が、林業に興味を持ち、林業への就業に繋がってくればと思います。

まとめ

熊野林星会

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

森林・林業への関心・就業促進に向けた 県内2校のインターンシップ 山口県林業研究グループ連絡協議会「山口県」



2人がかりの丁寧な指導のもと、2年生がフォワーダ操作体験

県内2校で行った今年度の活動を
紹介します。

県立山口農業高校の
1～3年生の取り組み

〈1年生〉

森林・林業の基礎学習と
VRによる伐木体験

山口県立山口農業高等学校（以下、山口農業高校）環境科学科は、県内で唯一林業を学べる高校で、2年生から自身の進路を考えた上で「森林資源」と「農業土木」のコースに分かれます。このコース分けを控えている1年生の参考になるよう6月23日（木）、35名を対象に、森林・林業についての講義とVRを使った伐木体験を行いました。

講義では、山口県の森林資源の現状や森林の持つ多面的機能の重

要性など森林・林業に関する基礎知識や、森林組合と林業事業者の違いなど就業に関する様々な内容について説明しました。

本県の森林の多くが伐期に達し、森林・林業が大きな転換期を迎えていること、林業の活性化には若者の力を必要としていることなどを呼びかけ、生徒は熱心に耳を傾けていました。

また、実際にチェーンソーを使



真剣に講義を聴く1年生

山口県林業研究グループ連絡協議会は、森林の役割や林業の重要性に対する理解を深め、林業・木

材産業分野への就業を促進するため、高校生を対象にインターンシップに取り組んでおりますので、



VRの迫力ある伐木体験に興味津々

10月4日(火)、
森林資源コース2
年生17名を対象に、
山口県中央森林組
合(以下、森林組
合)の素材生産現
場に赴き、高性能
林業機械による作
業の実演と操作体
験を実施しました。
はじめに、森林
組合職員から組合
の組織概要や高性
能林業機械の特徴
を説明していただ
いた後、現場で車
両系高性能林業機

械による作業システムの流れを実
演により説明していただきました。
続いて3班に分かれ、実際にプ
ロセッサ、フォワーダ、グランプ
ルの操作体験です。
プロセッサの操作体験では、森
林組合作業班の方から仕組みや機
能、特徴の説明を受け、作業の様
子を見学した後、生徒1人1人が、
それぞれ枝払い・玉切りを体験し
ました。



森林組合職員より現場での説明

ったことや触ったことがない生徒
が多いため、林業の現場には必要
不可欠なチェーンソーに関する基
礎知識を説明しました。
VRを使った伐木体験では、チ
ェーンソー伐倒時の災害事例が体
験でき、生徒たちはVRに興味
津々でしたが、いざ体験してみ
ると自分の方向に立木が倒れてく
るなど迫力ある映像に驚いていま
した。

実施後のアンケートでは、「林

業の仕事は危険だが、地球全体の
機能を支えていて、やりがいがあ
るとわかった」や「林業の仕事は
怪我が多く大変そうだと思ったが、
その分やりがいを感じるため林業
の仕事に就きたいと思った」とい
う意見があり、林業の仕事に対し
て興味を持ってもらうことができ
ました。

〈2年生〉
プロセッサ、フォワーダ、
グランプル操作体験



2年生のプロセッサ操作では枝払いと玉切りを体験



3年生は製材工場で一連の工程を見学

フォワーダの操作体験では、搬出現場での役割や特徴、性能などの説明を受けた後、4mに玉切られた木材を荷台へ積み込みました。当日は時間に限りがあったため積み込みまで、運搬（走行）体験は残念ながら行いませんでした。

グラップルの操作体験では、山土場で木材の極積みを行いました。

生徒たちは森林組合職員の丁寧な指導に熱心に耳を傾け、少し緊張した表情で操作を行い、とても貴重な体験をすることができました。

〈3年生〉

就業に向けた製材所見学

6月24日（金）、森林資源コース3年生17名を対象に、製材工

場と森林組合の素材生産現場の見学を行いました。

はじめに、山口農業高校卒業生が就職している大林産業株式会社本社事業所（製材所）を訪問し、自社で伐採・搬出した丸太を並べている施設内の土場から製材・乾燥・プレカットなど一連の工程を見学しました。大林真信社長から、県産木材を主体とした製材・プレカットなどの業務内容や、木質バイオマスボイラーを導入し端材を木材乾燥に活用するなど、環境に配慮した取り組み、集成材などについて説明していただきました。

続いて、森林組合の搬出間伐現場で、取組状況や生産システムの説明、ハーベスタによる伐倒から造材までの実演を見学しました。作業体験では、グラップルによる積込作業を体験し、生徒たちは見学先での説明にメモを取るなど熱心に取り組む姿勢が見られました。特にハーベスタによる伐倒では木が倒れる時の迫力に大変驚いていました。

山口農業高校の就業状況

近年、同校からは毎年2名程度

が林業・木材産業へ就業しています。

このインターシップの効果により、森林資源コースを選択する生徒が増えたと先生からお聞きし、各学年に合わせた内容で実施してきた成果が得られたと感じています。

今後も林業・木材産業への理解を深め、就業における選択肢となるよう、この取り組みを継続して実施したいと考えています。

県立萩商工高校 2年生の取り組み

地域産材建築見学・講義

10月24日（月）、県立萩商工高等学校の電気建築科建築コース2年生6名を対象に、森林・林業と県産木材への理解を深め林業木材分野への就業を促進することを目的として活動を行いました。

はじめに、「木造建築」の知識を深めてもらうために、阿武町の「ABUキャンプフィールド」を見学しました。この施設は阿武町の日本海沿いにあり、令和4年3月にオープンしたばかりの施設で、管理棟等の建屋に地域産材が多く



地域産材建築施設見学で森林・林業をもっと身近に感じてもらう

利用されています。

この施設のコンセプトは「キャンプを目的としないキャンプ場」で、利用者にはここを拠点として町内での様々な体験、観光を通じて町の魅力に触れてもらい、人や経済の循環を目指しています。

見学では、施設の概要を阿武町まちづくり推進課職員、施設の見学をキャンプフィールドマネージ

ヤー、建築技術については施工を行った協和建設工業株式会社、波多野建設株式会社担当より説明、案内を受けました。

続いて、林業について学び・体験するために、阿武町の山間部にある福賀地区に移動し、この地区を中心に林業を行っている有有限会社吉岡土建（以下、YOSHIOKA）林業部から講義を受けまし

た。まず、「林業と木材の利用」と題して、森林・林業、バイオマス等木材の利用全般について説明を受け、続いて若手社員の1日を記録した動画を視聴しました。これは社のPR用動画でYOSHIOKAのホームページから視聴できます。

午後より、素材生産現場に移動し、チェーンソーによる伐採、高性能林業機械の実演を交えながらの説明を受け、実際にハーベスタ、グラップル、スイングヤーダ、フォワーダの操作体験を行いました。

キャンプフィールド、YOSHIOKAの素材生産現場での説明後には生徒から多くの質問があり、特にYOSHIOKAでは予定時間を超過するほどで、生徒たちの興味の高さが窺えました。

実施後のアンケートでは「林業に就業したい」「興味が持てた」など就業に前向きな意見がありました。これまでのインターンシッ



地元の林業人による講義では生徒から多くの質問があった

プでは直接の就業に繋がってはいませんが、近年、転職が当たり前の時代ともいわれており、この事業によって生徒たちの選択肢は確実に増えたと考えています。

また、同校ではインターンシップの一環として、生徒たちが県産木材を使用してベンチを製作しています。木造建築の木組みを考え、た構造のベンチで、完成後は公共施設等に設置する予定です。

＊まとめ

山口県林業研究グループ
連絡協議会

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

町や県と関係した 息の長い後継者育成活動を かみやま林業振興会「徳島県」



グラップルで丸太の整理にチャレンジする生徒

神山町と かみやま林業振興会

神山町は徳島県の中央部に位置

し、東西を流れる鮎喰川^{あぶく}を中心とした森林率86%、人工林率69%の山間の町です。主要産業は農林業

で、なかでも「すだち」の生産量は日本一を誇ります。過疎化と高齢化が進んでいますが、近年では国際交流やサテライトオフィスの誘致を進め、令和5年4月からは「神山まるごと高専」の開校も予定されており、「進んだ田舎」の印象を受ける土地柄です。

このような神山町で、すでに町内に存在していた林業研究グループがまとまり、平成5年にかみやま林業振興会（以下、振興会）が誕生しました。会員は71名で、主に町内に山林を所有する者で構成されています。現在までの主な活動は、チェーンソー講習会や講演会の開催、杉天然絞り丸太の振興やミツマタ栽培など、時節に即した内容で取り組んできました。なかでも「地域林業における後継者育成及び確保の支援」は、振

興会の活動の大きな柱となっています。

地元高校を対象に 林業体験現地研修会

森林資源の充実した神山町ですが、安定的に素材生産を行う林業事業体は徳島中央森林組合のみとなっており、地元産業や林業技術の継承の面からも、後継者の育成は、長らく続く最大の課題となっています。そこで振興会では地元高校である県立城西^{じょうせい}高等学校神山校（以下、神山校）を対象に、毎年、森林組合や町役場の協力のもと、林業体験現地研修会を実施しています。

神山校は平成31年度に再編され、それまでの造園土木課が環境デザインコースへと生まれ変わりました。「森林に学ぶ『森林科学』」の

科目が創設され、これまで以上に就業先として林業への関心が高まることが期待されています。

そのような中、今年度は3年生11名を対象に、11月29日、森林整備センター分収林にて現地研修会を実施する運びとなりました。

会員の得意分野を生かした役割分担

例年、この研修会の活動内容や役割分担については、振興会の役員会において詳細を決定しています。今回も事務局から大まかな計画案が提示された後、

各々の役割を決定しました。会員にはそれぞれの得意分野があるので、例えば、トイレの架設は何々さんに、チェーンソーの担当は何々さんに、といった具合です。

毎年のこととはいえ、会員も高齢化しているなかで、これまでにかが不足して困ったというよう

なことは一度もなく、お互いに協力して長年にわたり活動を継続できたことは大きな成果だと感じています。

雨天！ならではの現地研修会

さて、現地研修会の当日ですが、なんと、5年ぶりの雨天となってしまいました。数少ない現地での本格的な活動だっただけに、大変残念でした。

しかし、雨なら雨なりに、ということで気持ちを切り替え、雨の



若手森林組合職員による木材市場の説明を受ける

日用のプログラムへチェンジです。振興会の岡本悦男会長からの挨拶の後、まずは森林組合の職員の方から、木材市場の説明をしていただきました。市場の機能について、運び込まれた丸太を樹種や所有者ごとに区別すること、また、ウッドショックで価格の上昇が見られたこと、などを教わったのですが、担当が入社3年目の若い職員さんであったので、生徒にとっては林業関係への就業がより身近に感じられたようです。



森林整備センターの職員より水源林造成事業の説明を受ける

れた生徒も見られ、指導者の話を聞きながらも楽しんで作業をしているようでした。また、グラップルを2動員した操作体験では、ある程度各々の操作時間が確保できたため、難易度の高い操作（丸太の整理）を自ら希望してチャレンジする生徒も見られました。悪天候のおかげで土場作業となったことが、かえって生徒たちには落ち着いて体験できたというプラスの側面もあったように感じました。

次に森林整備センターの職員さんから分収林の説明を受けたのち、土場での機械体験となりました。

チェーンソーの操作体験では、会員が1人1人に一から優しくアドバイスし、安全に留意しながら操作を行っていました。が、すでに手慣



会員よりチェーンソー操作の指導を受ける生徒

**神山町や徳島県と
関係した就業成果**

徳島県では平成28年

度から「とくしま林業
アカデミー」を開講し
ていますが、例年、同
アカデミーにおいて神
山校に向けたインター
ンシップを実施してい



雨のため、土場でのグラップル体験に

ただいています。それが奏功して、
アカデミー開校以来、神山校から
10名の人材がアカデミーを通じて
林業界へと巣立っています。

また一方で、振興会がアカデミ
ー開校以前から実施している、息
の長い支援が形となって表れてい
るのではないかとも思います。

ちなみに、前述した神山町内の
森林組合へは、現在、アカデミー

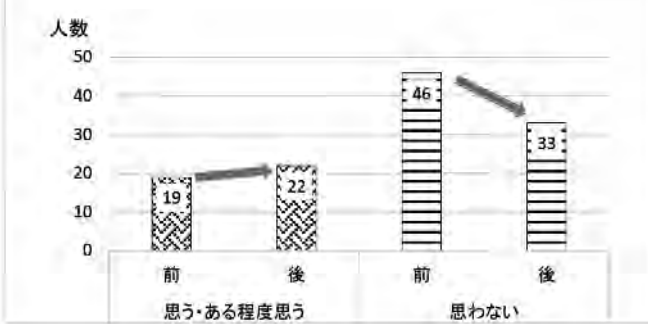
	とくしま林業 アカデミー開校				神山校再編成			
年度	H28	H29	H30	H31	R2	R3	R4	計
アカデミー入学人数	11	13	13	15	13	19	22	106
うち神山校出身	0	2	0	1	0	5	2	10

※R5は2名予定

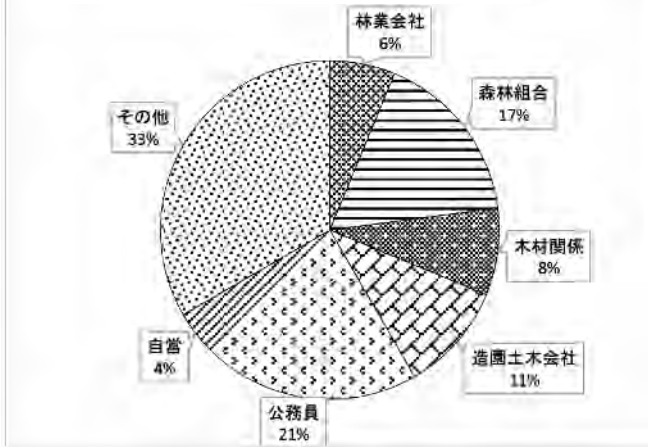
地元森林組合勤務
R4年 12月現在 5名

表 とくしま林業アカデミーと神山校

グラフ1 林業に関わる仕事をしたいか



グラフ2 将来就きたい職業



**研修会の前と後では
生徒のアンケートから
検証**

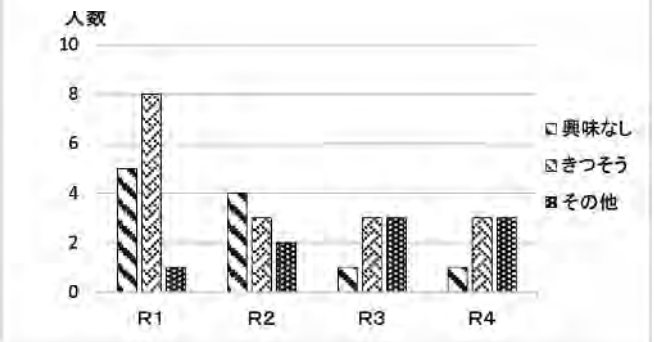
研修を受けた生徒には、毎年ア

卒業生の5名が就業し、中心的な存在として活躍しています。このように、地元での人材の育成から確保までを神山町や徳島県と連携して行っていることは、地道にはありますが、支援を長年続けてきた喜ばしい結果として受け止めております(表)。

また、将来就きたい職業については「その他」を除くと、公務員に次いで森林組合が最も多い結果となっております。「その他」が多

アンケートを実施しています。令和元年からの累計データを見ても「将来林業に関わる仕事をしたいか」の問いに、研修を受けた後では「思う」、または「ある程度思う」と答えた人の数が研修を受ける前より増加しており、反対に「思わない」と答えた人の数は減少していました(グラフ1)。

グラフ3 林業に関わる仕事に就きたくない理由



今後の活動

神山町内では、前述の「神山まるごと高専」や集合住宅の建設、またエネルギー利用などに町産材が活用されています。このように地域の森林資源を持続的に使い続けるためには、林業の担い手はなくてはならない存在です。

振興会では、神山町の森林サイクルを確立するため、今後とも人材育成確保の一端を担うべく、息の長い活動を目指していきます。

いのは、令和元年度は造園土木課と生活課の生徒に、また令和2年度は造園土木課の生徒を対象としているためと考えられます(令和3年度以降は環境デザインコースを対象。グラフ2)。

林業に関わる仕事に就きたくない理由の合計数では「仕事がつき

かみやま林業振興会事務局

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

高校生36名全員がチエーンソー体験！ 森林・林業の仕事に興味を持ってほしい 京都森林研究グループ「福岡県」



緊張感のなか、生徒全員が丸太の輪切りを体験

「豊国」で活動する
林業研究グループ

「高校生を乗せたバスのUター

ン場所はこの場所でもいいやろうか？」「今のうちに、伐採する場所の下見と段取りをしちようや

(しておこう)」

12月2日(金)の早朝、雪の舞い散る山の中で、オレンジ色のユニフォームを着た京都森林研究グループ(中川準一会長、以下、京都林研)の会員たちは、白い息を吐きながら林業体験研修の準備を始めました。

ここは、福岡県京都みやこ町です。福岡県北東部に位置しており、瀬戸内海に面した穏やかな気候の地域で、古くから「豊国」と親しまれ、海の幸から山の幸にいたるまで、多種多様な産物がみられる場所として知られています。林業においても古くからヒノキの植栽が盛んで、現在は「京築ヒノキ」の産地としてブランド化に取り組んでいる資源豊かな地域です。また、今でも集落ごとに神楽が継承されるなど伝統的民俗芸能・文化

が育まれています。

このように、地域の資源や文化が豊かな地域で活動しているのが京都林研です。

多彩な職業と幅広い年齢で構成する京都林研

京都林研は、平成19年8月の市町村合併をきっかけに、森林・林業を取り巻く状況をなんとかしようと考えた18名のメンバーが、「知恵と力を出し合って山林の育成と緑の回復を図り、次世代に繋がる自然環境を創造する」という新たな活動方針の下、犀川町林業研究グループの再編成を行い誕生しました。

本会の中川会長は、故郷の森林を復旧するために45歳から林業の道を歩きました。それまでは、北九州市内でトレーニングジムを経



雪が舞い散るなか、林業の魅力を熱く語る中川会長

県立行橋高等学校（以下、行橋高校）環境緑地科2年生の36名が現地に到着し、林業体験研修が始まりました。

就業意識高まる 行橋高校生の 丸太輪切り、 機械操作体験

「魅力を高校生へ直接伝える機会を得ることができて、何よりも嬉しいです」と意欲満々でした。

現在では「中川林業」という林業事業体を設立し、森林施業の受託や共同利用機械の導入など、小規模森林所有者や新規就業者が安心して林業経営を行うことができます。そのような中川会長の熱い思いに賛同した方々が集まり、現在の

営していたのですが、その時に訪れたロッキー山脈の麓のアスペンで出会った現地の人「本当の豊かさは、自然の中で暮らし、自然を相手に仕事をする事」という一言に触発され、故郷の森林を復旧するため、林業の道に進みました。

現在では「中川林業」という林業事業体を設立し、森林施業の受託や共同利用機械の導入など、小規模森林所有者や新規就業者が安心して林業経営を行うことができます。そのような中川会長の熱い思いに賛同した方々が集まり、現在の

の魅力を高校生へ直接伝える機会を得ることができて、何よりも嬉しいです」と意欲満々でした。

取材当日に、中川会長に勧誘され、新会員として加入した野村謙夫さん。林業機械の修理やメンテナンスを行う会社の社長です。「私の仕事は、壊れた林業機械を見て修理することが多いのですが、京都林研で活動することで、使っている機械の風景を見ることができ、なぜ機械が壊れるかがわかるので仕事に役立ちます。それに、林業

会員数は20名です。30代から70代まで幅広い年齢層にわたり、職業も森林組合職員、農林業や会社員、公務員、造園業者や薪ストーブ代理店と多彩なメンバーで構成されています。

た。

この研修は、平成25年度から10年継続しており、京都林研にとって大事な活動の1つです。「行橋高校の環境緑地科2年生が、森林・林業を知り、仕事として興味を持ち、将来森で働く機会になれば」との中川会長の強い想いが発端となっています。

まず、午前部の最初のプログラムは丸太輪切り体験です。作業注意点の説明後、2班に分かれて作業開始。1班は副会長で森林組合に勤務する浦田健一さん、2班は顧問で公務員の竹内寿一さんが指導します。最初、生徒たちは防護服を付け合いながら和気あいあいの雰囲気でしたが、2人がチェーンソーを使って見本を見せた途端、雰囲気は一変し、緊張感に包



希望者生徒にはグラブプル操作体験も行った

まれました。

その緊張感のなか、全員の生徒が、上から、下から、合わせ切りと、3回の丸太切りを行いました。合わせ切りの跡を見て、「もう少し上手に切りたかった」と言う生徒もいれば、切った丸太を持って帰ろうとする生徒もいました。

続いて、グラップルの操作体験です。こちらは、

日頃、重機オペレーターとして仕事している奥竹会員が講師となり、希望者だけに操作体験指導を行いました。「UFOキャッチャーみたいで楽しい」と操作上手な生徒もいました。

肌で感じる 伐倒体験

昼食後は、午後の部であるスギの立木伐倒体験です。中川会長と浦田副会長の2班に分か



受け口と追い口、クサビ打ちと真剣に作業工程を説明する浦田副会長



真剣なまなざしでチェーンソーを持ち、追い口を作る生徒

れ、希望者が立木伐倒を行いました。浦田副会長から、受け口、追い口の作り方、クサビの打ち方やその意味、役割などについて、危険な作業であることを含め、丁寧に説明がありました。

その後、1人目の生徒が、浦田副会長の指導のもとで実践。浦田副会長に受け口を作ってもらった後、追い口作業を自分でやってみますが、簡単にはできません。指導してもらいながら、やっと追い口ができました。伐倒を始める前に笑顔だった生徒も、チェーンソーを持つと真剣な顔になっていきます。伐倒する姿を見学する周囲の生徒から「頑張れ！」と応援の声も聞かれる中で、追い口ができま

した。次はクサビ打ちです。浦田副会長が十分に安全を確保しながら、生徒はクサビを打ち続けます。遠くで見学する生徒も、少しずつ立木が傾いていく様子をじつと見守っていました。その後、立木の傾いていくスピードが次第に速まり、地響きをとどろかせながら木が倒れた時、生徒たちはしばらく



行橋高校 36名の生徒と林業体験研修を終えての集合写真

無言でした。しかし、その後は我々に返ったように、「木を伐った時の音がめちゃくちゃ好きだ」「木を伐ることがむげねえのお（かわいそうだな）」「面白い」と、興奮しながら感想を言い合っていました。

研修終了後、「中川会長のファンになった。写真撮ってください」と、大勢の生徒から写真撮影を求

められた中川会長はとても嬉しうでした。その姿を見守る会員たちの顔も「会長らしいな」と笑顔でした。

林業体験研修で 林業の道へ進んだ生徒も

行橋高校の龍田雅人先生は、「この伐倒を体験すると、生徒の目が変わります。林業体験研修を続

けていただいているおかげで、これまで約5名が林業関係の会社に就職しています。昨年度就職した元生徒からは、「体はキツイです。でも、山の中だからお金を使う場所がないです」と冗談交じりの報告があり、頑張っているようでした」と嬉しそうに話してくれました。

また、中川会長からは、「この研修を継続していたことで、3月には3年生5名をインターンシップとして受け入れる予定だよ」と嬉しそうです。

今後の活動アイデアが無限に出てくる

京都林研は、伊良原ダム周辺に桜の苗木を植栽する活動を含め活発に様々な活動をしています。

生徒たちを見送った後、すぐに「次の活動は、桜を植えるための草刈りだな。いつ草刈りしようか」と、事務局長の岩瀬文明さんがテキパキと段取りしながら次の活動の打ち合せをしていました。



日頃の活動が認められ、福岡県から表彰される京都林研

会長からは「会員たちのチェンソーワーク技術を高める研修をしたい」「今は、森林を所有しようとしたら簡単に所有できる時代だ。自伐型林業を育成する取り組みも着手する」と、今後の活動アイデアを次々に発表していました。このような日頃の活動が認められ、県から「第23回福岡県農林水産まつり農林水産賞林業部門」で名誉賞を受賞された京都林研、今後の活動がますます楽しみです。

*まとめ 編集部

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

林業技術・鳥獣被害対策研修で 地域の魅力や課題を共有する 芦北地域林業研究グループ「熊本県」



鳥獣被害対策に関する研修会で
くくりわな、はこわな、の基礎知識も習得

水俣・芦北地域と 芦北地域林業研究グループ

芦北地域林業研究グループ（以

下、当グループ）は、平成12年に
それまでの芦北地区林業研究グル
ープ連絡協議会（昭和36年設立）

を構成していた7つのグループが
合併して誕生し、現在は、水俣・
芦北地域の自伐林家や林業経営者
など会員22名で活動しています。

当グループの活動拠点である水
俣・芦北地域は熊本県の南端に位
置し、水俣市、芦北町、津奈木町
の1市2町で構成され、温暖な気
候で、西は不知火海しらぬいかいに面し天草の
島々を望む風光明媚な地域です。

森林面積は2万8000haで、
森林率は66%。そのうち民有林の
人工林率は79%と県内でもトップ
クラス。また、当該地域は以前
クロマツの短伐期密植造林を行う
「芦北林業」で有名で、明治時代
中期には北九州などの炭鉱開発で
使われる坑木の供給地となってい
ました。その後、炭鉱の閉鎖とマ
ツクイムシ被害によりマツ林跡に
ヒノキが植林され、人工林に占め

るヒノキの割合が56%と県内他地
域に比べ高いのが特徴です。

この豊かな森林資源を持つ水
俣・芦北は昔から林業が盛んな地
域で、当グループも設立以来、先
進地への視察研修や勉強会の実施
産直住宅の取り組み、また地域の
高校生等への林業技術指導など、
幅広く活発な活動を続けています。

地域の現状と課題

林業就業者数は全国的にも減少
傾向にあり、また高齢化も進んで
いますが、これは当該地域におい
ても同様です。

併せて、当地域は近年、シカに
よる森林被害が急増しており、自
伐林家や林業経営者の森林経営意
欲が低下し、担い手不足が加速す
るのではと危惧しています。

さらに、そのような中、令和2



林業技術研修会開会の様子（芦北高校鏡山演習林にて）

年7月に大規模な豪雨災害が当地域で発生し、死者、行方不明者合わせて15名となるなど甚大な被害となり、森林・林業関係被害も約85億円に上りました。

近年、このような大規模な自然災害が全国各地で多発している中、森林の持つ公益的機能や、その維持・増進に必要な森林の適正な循環利用の重要性が改めて注目される一方で、それを担う林業従業者の減少や高齢化が進んでおり、担い手の確保・育成は当地域の喫緊の課題と捉えています。

地域にある県立芦北高等学校（以下、芦北高校）は、全国でわずか3校しかない林業を専科とする学科（林業科）のある高校の1つで、創立は大正10年（当時は葦北農林学校）と歴史も長く、全国の森林・林業業界へ多

知識・技術の伝承と魅力伝える交流と共有

くの優秀な人材を送り出しています。

当グループでは、芦北高校2年生を対象に、熊本県南広域本部芦北地域振興局林務課の林業普及指導員と連携し、チェーンソーを使った間伐と高性能林業機械操作の林業技術研修会を毎年行っています。

この研修は、森林・林業に関する知識や技術を伝承するだけでなく、会員が生徒と交流すること



チェーンソーの基本操作について指導を受ける



枝払い、玉切りといった造材も体験

で、林業や山村地域生活の魅力課題を生徒と共有することができ、貴重な機会と捉え、平成25年から続けている取り組みです。

実施内容は次のとおりです。

- ①実施日：令和4年10月6日（木）
- ②実施場所：芦北高校鏡山演習林
- ③研修対象：林業科2年生34名
- ④研修内容…

① 間伐研修（選木、チェーンソーによる伐倒・枝払い・玉切り）



会員の指導のもとプロセッサを実際に操作する生徒

②高性能林業機械（プロセッサ）の操作体験

⑤研修指導…

当グループ会員4名

熊本県南広域本部芦北地域振

興局林業普及指導員3名

生徒を1班11〜12名の3班に分

け、2班で間伐研修、1班で林業

機械操作研修を90分で全班が一巡

する方法で実施しました。

指導者を各班に2、3名配置し、

間伐研修では選木の方法からチェ

ーンソーによる伐倒、枝払い、玉

切りといった造材の基本作業を実

習します。また、林業機械操作で

は演習林にプロセッサを搬入し、

素材生産業を営む会員より操作方

法の指導を受け、生徒全員が造材

作業を行いました。

研修を経て、実際に林業の現場

に魅力を感じた生徒も多く、その

ような生徒の中から、地域の林業

を担う若者が1人でも出てくれればと期待しているところです。

野生鳥獣被害対策の重要性を伝える

前述のとおり、近年、シカによる森林被害が深刻化しています。

地域の若者、特に高校生にシカ被害という地域の課題を共有し、その解決について、地域の方々と一緒に考えて、行動していくきっかけをつくり、抜本的な対策となるシカの捕獲を担う人材（狩猟

後継者）の確保・育成に繋げることを目的に、令和2年度から野生鳥獣被害対策に関する研修会も行っていきます。

具体的な内容は次のとおりです。

① 専門家を講師に招いたシカ等野生鳥獣被害対策研修の実施

今年度は、間伐研修に参加した林業科2年生34名に加え、農業科生徒22名も参加しました。

講師は、地域一丸となった野生鳥獣被害対策の優れた取り組みが全国的にも脚光を浴びている団体



くまもと☆農家ハンターの稲葉さんによる講義の様子

「くまもと☆農家ハンター」に依頼しています。

この研修会を始めたことで、シカ

等野生鳥獣被害対策が地域の重要な

課題となつてい

ることを高校生と共有することができて

います。

② 高校生や高校教

諭の狩猟免許取得支援

前述の研修会に

参加し、シカ等野

生

鳥

獣

被害

対策

に関

する

研修



狩猟免許を取得した生徒、教諭およびそれを支援する会員、猟友会の皆さん

生鳥獣被害の現状とその対策の

必要性について認識を深めたこ

とにより、地域のために自らシ

カを捕獲したいという気持ち

がわく生徒や教諭も多く、そのよ

うな中から1人でも多くの若者

がシカ捕獲を担う人材となつて

もらうことを目的に、令和2年

度から県の事業を活用して、生

徒や教諭の狩猟免許取得の支援

(狩猟免許受験費用等の補助や勉強会の開催)

を行っています。なお、これま

で(令和2、3年度)20名の生

徒、教諭が狩猟免許を取得しま

した(令和4年度は8名が受験予定)。

③狩猟技術研修会の実施

また、狩猟免許を取

得した高校生等に対し、

林研グループの会員や

地元猟友会の方が講師

となり、鏡山演習林等を

フィールドに、"くくりわな"

や"はこわな"の技術研修

会を実施しています。研修

会では実際にわなをかけ、

シカの捕獲に挑戦してもら

っています。これまででシ

カ10頭、イノシシ6頭が捕

継続することの大きな責任とやりがい

間伐等の研修会については、芦北高校林業科の授業のカリキュラムとして組み込まれ、また、鳥獣被害対策についても、林業科だけではなく、農業科でも授業の題材として取り上げていただくようになりました。



生徒が実際に鏡山演習林に「くくりわな」を設置

これらの活動を継続してきたことよって、授業の一環として重要な位置づけになっていることに、大きな責任とやりがいを感じています。

当グループでは、地域の関係業界や行政、学校関係者などと連携しながら、水俣・芦北地域の現在と未来が繋がる取り組みをこれからも続けていきたいと思

まとめ

芦北地域林業研究グループ
連絡協議会 事務局

事

高校生等の林業就業促進現地活動

例

継続でつなぐ林業体験研修 高校生に架ける林業への橋

かどかわ
門川町林業研究グループ連絡協議会「宮崎県」



門川高校総合学科2年生の林業体験研修

林業と高校生の架け橋に

門川町林業研究グループ連絡協議会（以下、門川林研）が活動す

る門川町は、宮崎県の北部、耳川

流域に位置し、日向灘ひゅうがなだに面して、

山・川に囲まれた自然豊かで風光

明媚な町です。町の約83%を占める森林は、長い日照時間と温暖多雨な自然環境から、豊かな森林資源を形成しています。

近隣の美郷町、諸塚村、椎葉村など林業の盛んな地域が含まれる耳川流域では、宮崎県の素材生産量約200万㎡の3分の1を占め、多くの林業事業体、木材市場、製材工場があるほか、みやざき林業大学校を有するなど、宮崎県の中心的な林業地域です。

平成7年設立の門川林研は、林業従事者を中心に、会社員や建設業、大工などの会員17名で構成され、平均年齢は40歳と比較的若いグループです。林道沿いの草刈りや植樹祭箇所の下刈り、町産業祭などのイベントにおいて小学生以下を対象に木工教室を行うなど様々な林研活動を進める中、中心

となる活動が、平成18年度から実施している県立門川高等学校（以下、門川高校）での林業体験研修です。

門川高校は、平成19年に林業学科が廃止されましたが、現在でも総合学科の栽培ビジネス系列において「森林科学」の必須科目、林業専攻の2年生、3年生での「林産物利用」と「総合実習」が行われており、県内では唯一の林業を学べる高校となっています。門川林研会員の多くが門川高校の卒業生だったことや、当時の林研会長が門川高校のPTA会長を務めていたことがきっかけで、「林業と門川高校の架け橋になる存在になりたい」と一念発起し、門川高校での林業体験研修が誕生しました。林業への新規就業者の獲得という最たる目的のために、まずは高

在校生に林業の楽しさを感じてもらい、興味を持つきっかけになればという思いで活動しています。

原木市場、木材加工場 見学と基本の講義

研修は年に1度、総合学科（栽培ビジネス系列）の2年生20〜40名を対象に実施されます。開始当初はチェーンソー操作のみの研修



原木市場の見学

でしたが、平成22年度からグラップルやプロセッサを使った林業機械の操作実習が加わり、平成27年度からは、県から委託された（公社）宮崎県林業労働機械化センター（以下、機械化センター）と同での研修を行っています。

午前中は機械化センターによる宮崎県森林組合連合会の原木市場や木材加工場、中国木材株式会社日向工場などの見学や、宮崎県林業技術センター森の科学館で森林の働き



いざ林業体験研修。まずはオリエンテーション

などについての講義を行い、午後から門川林研による林業体験研修を行います。

作業全体の流れ、 現場の臨場感を重視した 機械体験

研修当日は、高校の中庭にグラップルとプロセッサが据えられ、

林研会員の山林から伐り出されたスギ4m材、20本が運び込まれました。生徒の安全のために、事前準備として入念なチェーンソーの目立てが会員により行われます。

生徒が集合し、オリエンテーションの後、グラップルとプロセッサの操作、チェーンソーの操作で生徒を2班に分け、各班に会員が3名ずつ付いて研修を行います。

グラップルやプロセッサの操作研修では、グラップルで丸太を掴み、

回転させて横へ移動させる作業、プロセッサで丸太を掴み、適度な長さ玉切りする作業を行います。が、実際の伐出作業の流れの中で、どのような工程かを説明し、林内をイメージさせ、現場の臨場感を持たせるように努めています。

生徒の感想

「グラップルとプロセッサでは、どっちのほうが難しかった？」という質問に対して、「プロセッサの方がボタンの数が多くて大変だった」と顔をしかめる生徒もいれば、「どっちも簡単だった」「ゲームのようだ」という頼もしい回答を返してくれる生徒もいます。

また、チェーンソーの操作研修では、始動方法から玉切りまでの指導を行います。まずは防護服の着用体験をしますが、万が一、ソーチェーンが体に触れたとしても、防護服の繊維が絡まることでチェーンソーの動きが止まることを説明すると、生徒の反応はそれぞれで、素直にうなづく生徒もいれば、本当にそうなのかと疑問に感じているような生徒もいます。

いざ着用となると、手間取る様



生徒同士が協力して、防護服を着用



プロセッサの操作体験。ボタンが多くて大変だったという生徒も



チェーンソーの操作研修では、上手な女子生徒もいれば、緊張で力んでしまう男子生徒も



子が見受けられましたが、生徒同士が協力して着用する姿もありました。チェーンソーを扱う前は「怖い」という声や不安な表情を見せる生徒が多いですが、会員による1対1での丁寧な指導の下、体験後は「楽しい」「面白い」という声飛び交います。男子は緊張で力んで、チェーンソーの刃が地面に当たったり、女子はエンジンをかけるのに苦労したりしますが、操作後は安堵するようで、会員に笑顔を見せてくれるのが印象的でした。

研修後の質問タイム お金、資格、やりがい

令和2年度からは新しい試みとして、林業体験終了後にぎっくばらんな雰囲気の中で生徒から会員や関係者方に質問するタイムを設けました。

Q ポーナス等がありますか？

A 頑張って働いてもらえるなら出します（林研会員の林業経営者）。

Q 機械を買ったり資格を取ったりする時にはお金を補助してもらえますか？

Q 内容によりませんが、補助する制度はありますか。農林水産業を頑張っている方をサポートするために、様々な補助制度があります（役場担当職員）。

A 山主の期待に応えることがやりにくいですが、複数の職に就いてきたけど、林業は生涯続けたいと思えます（林研会員の林業経営者）。

生徒からの質問は、お金、資格、やりがいといった要点を押さえた内容であるため、高校2年生の素直さと、自分の将来への真剣な思いを感じることができました。林家の家庭からの生徒はおらず、生徒は林業従事者から直接学べる貴重な機会でもあり、林研会員は母校生徒と触れあえる機会でもあります。生徒の人生設計を手助けするために、今後も継続していくこととしています。

活動への手応え、継続、そしてつながり、展望

林業体験研修は、平成18年度から17年継続して実施しており、こ

表 門川高校の林業関係への卒業生進路先(卒業時点)

卒業年度	進路先	生徒数
平成21年度	一般社団法人ウッドピア諸塚	2名
	王子木材緑化株式会社	
平成22年度	有限会社一山木材	2名
	有限会社藤本木材店	
平成23年度	株式会社川上木材	1名
平成24年度	一般社団法人ウッドピア諸塚	2名
	菊田林業株式会社	
平成26年度	中国木材株式会社	2名
平成27年度	中国木材株式会社	2名
	小松樹苗園	
平成28年度	中国木材株式会社	3名
平成29年度	延岡地区森林組合	1名
	中国木材株式会社	
平成30年度	中国木材株式会社	2名
	有限会社一山木材	
令和元年度	みやざき林業大学校	2名
令和2年度	中国木材株式会社	2名
令和3年度	中国木材株式会社	5名
	耳川広域森林組合	
	みやざき林業大学校	

れまでの生徒の進路は、林業関係に8名、製材関係に14名が就業、みやざき林業大学校に4名が進学しています（表）。令和元年度にはみやざき林業大学校が開講し、深く学びたいと大学校を目指す生徒も多いようです。

林業体験研修のアンケート結果では、「研修前、林業に関わる仕事をしたいと思いましたが」の問いに「思っていた。ある程度思っていた」が3割だったのに対し、「研修後、林業に関わる仕事をしたいと思えますか」の問いに「思っている。ある程度思っている」が6割と増えています。また、「今回の研修は、将来のために役立ちましたか」の問いに「大変役に立

った。ある程度役に立った」が97%と高くなっています。

このように、当該活動により、生徒が林業に興味を持つきっかけづくりに役立っており、門川高校からも大きな評価をいただいています。

令和3年度には、全国林業研究グループコンクールにおいて、この研修の取り組みを発表し、林野庁長官賞を受賞しました。全国的にも高く評価された取り組みだと、林研会員は自信を持って活動しています。

一方、門川高校では、スマート林業についても授業の中で取り組むこととしており、林研活動のつながりから、



研修終了後は和気あいあいと質問タイム

今年度は会員である地元森林組合職員が授業のサポートとして活躍しています。

門川林研は、今後も継続した活動による多方面の人のつながりを大切にしつつ、活動の改良・改善を図りながら、地元的林業後継者育成に取り組んでいきます。

***まとめ**

門川町林業研究グループ
連絡協議会 事務局

第2部

山づくり

人づくり

ものづくり

チャレンジ!

事

私たちのチャレンジ!

例

ニホンジカとの知恵比べ 竹と防風ネットで柵作り こまゆみ遊林会「長野県」



コナラの伐採跡の遠景。樹高程度の幅で带状に伐採

育てて、伐って、
使う
「森林循環」を
コンセプトに

青木村は、長野県の東部に位置し、田沢、沓掛の2つの温泉や国宝の大宝寺三重塔を有し、村土の8割が森林で三方を山に囲まれた田園風景が美しい人口4282人（令和3年7月末現在）の農山村です。

こまゆみ遊林会は、村松西地区に住む薪ストーブ愛好家6人が、伝統的な薪の調達を図りつつ、地域の森林保全を図ろうと「育てて、伐って、使



「里山の植生とその多様性
～雑木林の管理～」講座

う『森林循環』を活動コンセプトに平成27年に設立しました。現在、会員は32〜70歳（平均55歳）の13人で、花卉農家、建設業、IT関連企業等と幅広い職業で構成され、うち7人が村外からの移住者です。

地元の共有林で薪を生産
シカによる食害との戦い

会では、地元区の理解を得て、



こまゆみ遊林会の会員。
約半数が村外からの移住者

森林所有者の村松西地区共有林組合と協定を締結。平成30年から共有林95haのうち約1haを薪山として7区画に分け、萌芽更新や実生による天然更新が図られるよう樹高程度の幅で带状に伐採して薪を生産しています。

これまで、毎年実施している安全講習の成果もあり、怪我もなく



秘密道具のチェーンソードリル。
穴開けも一瞬



簡易柵の試作。身近な材料・道具で構造を検討

安全に新を生産してきましたが、「更新してきたコナラがニホンジカに食べられていて、このままで大きく育つのか」との懸念がありました。そこで、地元在住の里山

の植生の専門家を招いて講座を開き、里山の植生や雑木林の管理を学ぶなど、ニホンジカとの知恵比べが始まりました。

伐り出した竹と防風ネットの簡易柵を設置

講座を受け、会員で対策を検討した結果、伐採地外周の防護柵設置は費用や維持管理の観点から難しいと考え、身近な資材で設置や維持管理もしやすい、伐り出した竹と防風ネットで作る単木用の簡易柵を設置することにしました。



簡易柵の量産前に構造を現場で確認

3年前の伐採跡地から順番にコナラの更新状況を確認したところ、コナラの半分はニホンジカに食^はまれた状態でしたが、食害を免れた株立ちや、実生の稚樹が多く見られたことから、これらを保護できれば薪山として再生が可能な状態だと分かりました。そこで、コナラの稚樹を選び、地面に穴を掘り、竹を挿し、防風ネットを張り、簡易柵を試行してみたところ、なかなかの出来栄でした。

しかし、簡易柵を設置するのは風雨雪、落枝、ニホンジカに晒される過酷な環境です。長期間、コナラの稚樹が守られるよう、埋設0・5m、地上部1・5mに仕様を変更し、簡易柵を強化しました。ニホンジカとの知恵比べは始まったばかり。地域の森林循環と薪ストーブの温もりは、活動コン



簡易柵の設置。伐り出した竹を地面に打ち込む



完成していく簡易柵。コナラの成長を期待

セプトの「育てて」にフォーカスしたこの取り組みの成果に掛かっています。

*まとめ

こまゆみ遊林会事務局

事

私たちのチャレンジ!

例

地元産苗木の生産

多賀町林業研究グループ「滋賀県」

令和3年からの
チャレンジ

多賀町林業研究グループでは、育林技術の研鑽や特用林産物の普及に取り組んできましたが、近年、境界明確化にも役立つGPS測量や、獣害対策の一環としてのシカ肉料理など、

新たな分野へ取り組みを広げました。今回、会員の川村幸義さんを中心に、令和3年から始まった「地元産苗木の生産」の取り組みをご紹介します。

川村さんは、数年前に多賀町へ移住し

てきました。町内で約800haの山林を管理しながら、自身の林業技術を高めるため、そして「地域の林業を支えるために何かしたい」との思いから、平成28年に林研グループに入会しました。

「多賀には多賀の苗木を植えたい」

取り組みの発端は、川村さんの素朴な疑問からでした。「毎年、山を伐つて苗木を植えているけど、苗木は全部、ほかの地域から買っているなあ」。林業が盛んな町ですが、現在、町内で苗木は生産されていません。100年ほど昔は地元の山引苗を植えていたようで、50年ほど前からは福井や京都の苗木を試験もかねて植栽していたそ



会員の川村幸義さん（右）。シカによる剥皮害防止テープを巻いているところ

うです。現在では、県内の他地域で生産された苗木を植栽しています。それらの苗木は多賀町に根付き、今では伐期を迎えるものもありません。

しかし、「多賀には多賀の苗木を植えたい」、その思いが川村さんの心に沸き上がりました。「昔から多賀にあった木であれば多賀の



「立派なスギ」に出会い、母樹とすることになりました



枝から取った挿し穂（左）と種からの芽生え（右）



挿し木苗、実生苗、コンテナ苗の育苗を練習中

現在、あの「立派なスギ」から挿し木苗をつくり、採種用の母樹を育成する計画を進めています。

◆
 ニールハウスを借りることができました。苗木生産技術は、県指導林家でもある滋賀県山林種苗協同組合の宮城定右衛門さんに、育苗の一連の流れと各作業の方法について指導を受けました。宮城さんから種と幼苗を譲ってもらったので、育苗の練習を始めました。また、山から取ってきた枝から、挿し木苗づくりにも挑戦しています。

＊まとめ
 多賀町林業研究グループ事務局

その母樹から種を取り、苗木を作り、植林することが当面の目標です。将来、立派な『多賀スギ』の林を林研の仲間と地域の人人で育てていきたいと思えます。



移植完了。小さいながらも苗畑に



練習の一環で露地へ移植



育苗の指導を受ける川村さん（左）

風土に適しているはずだし、今よりも、もっと良い木を育てることができるはずだ」。早速、数人の会員に声を掛けたところ、「面白いな、やってみよう」となりました。

良いスギ（母樹）を探す

とは言うものの、母樹となる木を町内で見つけることができるか、という課題がありました。

「多賀の苗木を育てるのだから、

いい母樹を見つけない。そこで、地元の山をよく知っている林研の先輩の出番となります。相談すると、即答で良いスギの木があることを教えてくれて、案内も引き受けてくれました。

案内された林内をくまなく探し回ると、ひときわ樹高が高く、真っ直ぐで、幹回りも太く、木肌の美しい立派なスギに出会いました。このスギから多賀町産苗木第1号を作ることになりました。

育苗場は、川村さんの近所の方に相談して、使っていない畑とじ

事

私たちのチャレンジ!

例

何度も災害を乗り越えて。 ブランド「野迫川沢ワサビ」

野迫川村林業研究会「奈良県」

野迫川産の沢ワサビ

おろしたてのワサビを食べたこ



野迫川沢ワサビ。葉や花芽は
天ぷらにしても美味

とがありますか？ 野迫川産の沢ワサビは香りが強く、ほどよい辛さで食材の風味をより楽しませてくれる名脇役で、ワサビの葉や花芽をお漬物にする旨辛でやみつき間違いなしです。さて、わたしにワサビのおいしさを教えてくれた野迫川村林業研究会は、奈良県野迫川村で昭和38年から数々の困難に立ち向かい、現在もなお前進し続けています。



オーナーと花芽摘み。全盛期には20名ほどがオーナーに

放棄されたワサビ田を復旧

野迫川村は昔から沢ワサビの栽培が盛んでしたが、ワサビ生産者



野迫川村林業研究会のメンバー。20代から70代、林業・土建業・大工・地域おこし協力隊など業種もさまざま

の高齢化によりワサビ田が放棄されるようになりました。地域の活



ワサビ田の石垣の復旧作業では、メンバーが重機を持ち込み、巧みに操作した



大型台風によりワサビ田が陥没

平成23年、紀伊半島大水害に見舞われました。ワサビ田へ続く林道が崩壊し、ワサビも壊滅的な打撃を受けました。村民の生活さえ脅かされた災害でしたが、オーナーたちの励ましもあり、5年かけてワサビ田を復旧させました。そして平成28年、ワサビオーナー制度が復活し、また本会のワサビ田にたくさんの方が

何度も災害を乗り越えて

ワサビ10株を収穫できる権利を1口1万円で購入してもらうもの。オーナーのほとんどは県外の方で、都市部から家族連れでの参加が多かったようです。

多様な会員が得意分野で活躍
会員は、年齢層が幅広く、職業も多様です。それぞれが得意分野で力を発揮しています。本会活動について、「普段は一緒に仕事をしない人たちと活動でき、すごく勉強になっている」「ワサビができる・できひん関係なくい

多様な会員が得意分野で活躍

訪れるようになりました。そんな矢先、平成30年に今度は大型の台風が襲われました。大きな被害が出て、ワサビはほぼ全滅でした。オーナー制度の復活を目指して、もう一度ワサビ田の復旧作業を行ってきました。そして令和3年6月、復旧した本会のワサビ田にワサビが植えられました。このままこの状態が維持できれば、またオーナー制度を再開できると考えています。



ワサビの植え付け

い経験である」など前向きなコメントをくれました。課題も多くありますが、諦めず前進を続け、ワサビ田にまた、たくさんの方の笑顔が溢れるよう、活動を続けていきます。

*まとめ

南部農林振興事務所
森林共生推進第一課主任主事
東 瑛里奈

性化や特産品の継承を目的に、奈良県南部農林振興事務所からワサビ田の復旧作業ボランティアを募って復旧作業が始まり、少しずつ復旧していきました。復旧作業を共にした本会が、ワサビの生産は林業の合間にできると確信を持ちました。このため、

林業の副産業として復旧したワサビ田を引き受けることとなりました。それからは、ワサビオーナー制度(*)を導入したり数々のイベントを行い、地域の活性化に努めています。
*ワサビオーナー制度
ワサビ10株を収穫できる権利を1口1万円で購入しても

らうもの。オーナーのほとんどは県外の方で、都市部から家族連れでの参加が多かったようです。

事

私たちのチャレンジ！

例

林業と木育 2本柱で活動復活！

嘉麻市林業研究会「福岡県」

新生 嘉麻市林業研究会

嘉麻市は福岡県のほぼ中央に位置し、福岡県のおへそとも呼ばれています。かつては日本の近代化に貢献した石炭産地地筑豊の一角

として栄えてきましたが、現在は豊かな自然を生かした農業が中心の地域となっています。

昭和47年に設立された当会は、会員の高齢化等が年々進み、活動がほとんど行われない状態が続い

ていましたが、数

年前より若い会員が数名加わり、

徐々に世代交代が進んでいます。最近、活動の柱を



クヌギの伐採



民家裏の伐採作業



子どもたちと記念撮影（かまりんの森）

「林業」と「木育」に明確に分けた活動が活発化し、「新生 嘉麻市林業研究会」へと生まれ変わっています。

林業で 地域振興に貢献

令和元年度、バックホー、林内作業車の機械導入を契機に、自ら伐採できない林家の依頼を受けて、クヌギ林の伐採・搬出を行い、シイタケ原木として販売を始めまし



作業道作設（壊れない道づくりを目指して）

た。また、令和2年には、台風等で倒れる恐れのある民家裏の大木の伐採に取り組みました。伐採技術のある会員の指導の下、会員総出で困難な作業に挑戦したことで、大木伐採の経験を積むことができ、多少の自信ができました。将来的には特殊伐採の技術も身につけていきたいと考えています。



作成された「木いホルダー」



「木いホルダー」の材料調達

「かまりんの森」で木育

地元森林組合が実施する比較的規模の大きい事業とのすみわけを行い、微力ながら地域林業の振興に貢献していきます。

木育にノウハウのある会員の加

入を契機に、森林体験活動を通じて、市民にPRする取り組みを開始しました。体験活動の拠点は会員所有の森林「かまりんの森」で、会員の口コミやSNS等で参加者を募ります。この2年間は、広葉樹の枝葉を利用した「木いホルダーづくり」、樹木観察、薪づくりと焚き火体験等を行いました。参加者からは毎回、森林を身近に感じられるイベントで良かったと好評を得ています。

また、地元の小学校へ伐採したクヌギを持ち込み、シイタケの駒打ちから収穫までの体験活動を行っています。収穫したシイタケ

現在会員は7名で、今後新たなイベントや活動に取り組んでいくには現在の会員数ではマンパワー不足であり、新規会員の獲得が不可欠です。時代のニーズに応じた様々な活動を実施するにあたり、森林林業に興味のある人にまずは「かまりんけん応援隊」として当会の活動にお試し参加してもらい、会員の獲得に努めていくことにしています。

＊まとめ

会長 畑 吉明



薪割り体験

は学校給食で「食育」されています。今後、一般市民や子供たちを対象に森林体験を通じて森林に対する理解を深め、森林・林業の良き理解者や担い手が育っていくことを期待しています。

「かまりんけん
応援隊」で
会員獲得へ

事

私たちのチャレンジ！

例

「柿の葉茶づくり」 心も体も健やかに 美祢あさぎり会「山口県」

好奇心が原動力

はじめまして！ 私たちは、山口県美祢市の森林体験施設「森の

駅」を拠点に13名で活動している林業女性グループです。昭和56年の結成以来、竹炭やリース、苔玉など様々な森の恵みを活かした作品づくりと体験交流活動を行ってきました。

高齢化対策で 始まった活動

たりという作業が体力的に厳しくなってきました。

ました。

会員の「やって

みたい！」「知り

たい！」という好

奇心から、これま

で様々なことに皆

でワイワイ楽しく

取り組んできました

ですが、長く活動を

続けてこられた故

の悩みが会員の高

齢化です。素材集

めのために山を歩

いたり、竹を伐つ

どんな活動なら今の自分たちにできるのか？ と考えていた時

県の林業普及指導員さ

んから「柿の葉茶づく

り」を提案されました。柿の木な

ら会員の庭や裏山に生えています。

「これならできる！ おまけに柿

の葉茶の成分は美容にいいらしい

よ！」と即決でした。平成29年度

から取り組みをはじめ、作り方の

改良やパッケージのリニューアルな

どを行い、今では柿の葉茶づくり

が会の活動の中心となっています。



柿の葉の細断作業



完成した柿の葉茶
(1袋に3g × 15パック入り)



美祢あさぎり会の会員たち



柿の葉茶デザート試作会



柿の葉茶の試飲販売（手前ではリースづくりを指導）



柿の葉茶の淹れ方講習会（オンライン）

柿の葉茶の作り方

「柿の葉茶」に使う柿の葉は、8月上旬のまだ実の青い柿の木から収穫し、きれいに洗って堅い葉柄などを切り落とし、す。それから細かく切つて蒸した後、乾燥させて小袋に詰め、パッケージします。蒸し暑い季節の細かい作業ですが、すべて会員の手作業で製造し、毎年3〜4日、8名ほど

の活動で約120袋を作り上げます。

商品は地域の直売所などで販売し、おかげさまで好評です。特に淹れた時のお茶の色がきれいだと褒められることが多く、会員にとって「来年も頑張つて良いものを作ろう！」というモチベーションになっています。

柿の葉茶を通じた出会いを大切に

柿の葉茶のおいしさを皆さんに知ってもらおうと、農林水産関連のイベントや地域の

お祭りなどで試飲販売をしています。令和3年10月に開催された山口県内の林業女性が集う交流会では、柿の葉茶の淹れ方や柿の葉茶を使ったデザートづくりのオンライン講習会を行いました。デザートづくりは



柿の葉茶のバームクーヘン（生地とクリームに柿の葉茶を使用）

レシピ考案から本番まで何度も試作を重ね、飲むだけではない柿の葉茶の楽しみ方を提案できたのではないかと思います。これからも多くの方に森の恵みを知り興味を持ってもらう活動として、そしてまた、会員みんなが心も体も健やかに過ごせる活動として、おいしい柿の葉茶を自分たちのペースで作っていかうと思っています。

＊まとめ

会長 園田節恵

オニグルミシロップづくり

村岡林業研究グループ「兵庫県」

特用樹の活用を

村岡林業研究グループ（以下、「本会」）は、会員の所有山林の見学会を継続的に行っているほか、朝倉山椒の接ぎ木研修会などサン

ショウの栽培にも取り組んできました。令和2年度からは、樹液シロップの採取に挑戦しています。契機となったのは、令和2年9

月に実施したシカの食害に強い森づくり研修会で、会員15名のほか、香美町地域おこし協力隊や自伐型林業グループ但馬やまもり隊のメンバー5名も参加しました。

研修会では、ウリハダカエデやクロモジ等特用樹の樹木特性や、神河町で行われているウリハダカエデの樹液シロップづくりと特産物化などについて学びました。



樹液煮詰め作業の開始（この鍋で24ℓ）



アクを取り除きながら 1/100 まで煮詰める

地域に大径木が多い オニグルミを活用

研修会の参加者はウリハダカエデのシロップに強い関心を示しましたが、村岡区内には太いウリハダカエデがあまりなく、樹液の採取は難しいとあきらめかけていました。しかし、樹液シロップ



オニグルミの樹液採取の様子

はオニグルミからも採取できることがわかりました。オニグルミであれば村岡区内に大径木が多いため、地域おこし協力隊でもある会員を中心に、令和3年1月、樹液採取に取り組みました。

結果、3本のオニグルミから1月20日から3月8日までに128ℓの樹液を採取することができました。そして、この樹液を十数時間かけて煮詰めて100倍に濃縮

事

私たちのチャレンジ！

例



シロップ試食会



オニグルミ材で試作したカップと皿。将来は地域の特産品に



オニグルミシロップ試作品



オニグルミの実。食用のほか植栽試験（直まき造林）にも使用

し、1・3とほどのシロップを得ることができました。会員たちでウリハダカエデのシロップとオニグルミのシロップの

味比べをしてみたところ、どちらも甘さの点では変わりませんが、ウリハダカエデのシロップはあっさりしていてクセがなかつ

たのに対して、オニグルミのシロップは少しえぐみを感じるものの味わい深く自然な甘さが感じられました。今後は、

地域の特産品として販売を目指したいと考えています。また、オニグルミの材の活用を指し地域の木工家の方へお願いして、オニグルミ材からカップやス



直まき造林の様子

プーンを作ってもらいました。

若いメンバーの加入

本会も会員の高齢化や活動のマンネリ化などでグループ活動が低迷していましたが、今回、地域おこし協力隊の若いメンバーが加入し、オニグルミという新しい地域資源の存在や価値を再発見することができました。村岡林業研究グループはオニグルミの植栽試験も実施中で、しばらくはオニグルミをテーマに活動していきます。

＊まとめ

会員 谷野 博

事

私たちのチャレンジ！

例

小学生向け 森林・林業体験学習

大井川地区林業研究協議会「静岡県」

山と川が育む暮らし

大井川地区林業研究協議会（以下、「当会」）は、静岡県中部を流れる大井川流域のなかでも、林業・製材業が盛んな藤枝市・島田市・川根本町の2市1町で活動を行っています。河川が育む肥沃な土壌、日照時間の長さや昼夜の寒暖差、川から立ち上る朝霧という茶の生育に適した条件が重なり、この地域では、古くから茶業と木材・きのこの等の林産という半農半林の生活が営まれてきました。かつては、奥山で伐採された木材を大井川を利用して下流へ集積し、製材業が盛んに行われました。「木都」と称されるほどであり、まさに山と川とともに生きてきた地域といえます。当会の会員（37名）構成

は、森林所有者、自伐林家、製材業者、林業経営体従業員と多様で、林業技術の研鑽や情報交換・発信、後継者養成に取り組んでいます。

出前講義や間伐体験で 未来の担い手に 伝えたいこと

当会では、地域の小学校等と協力し、不定期ながらも年に1〜2回、出前講義や間伐体験を行っています。普段の授業で、森が二酸化炭素を吸って酸素を出していることや多くの生き物の住処になっていることを教わり、森を守ることは大切という認識はあるものの、それが行き過ぎて「木を切る」＝「悪いこと」と思っている児童も少なくありませんでした。

そのため、講義では、人工林は

適切に木を間引くことで健全な木が育ち、さらに下層植生が発達して土壌保全や生物多様性保全につながるということを意識して伝えるようにしています。令和



授業で間伐の大切さを教える



手入れされた明るい森林

3年度は、出荷予定の原木を小学校に運び込み児童に値段予想をしてもらい、木の価値を学ぶ講義を新たに試みました。環境保全と経済活動は、善と悪のように対立するものでなく、林業を通じて森林が健全に保たれ、生活に身近な木製品ができていることを子どもた



迫力のチェーンソー実演



手鋸で間伐体験



貯木場で丸太切り体験

また、学習指導要領による明確な教科と違い、現状森林教育の実現は教諭の裁量に委ねられる部分が大きい。

まとめ
大井川地区林業研究協議会
事務局

ちに伝え、森林整備に対する地域の理解や、未来の林業の担い手育成につなげていけます。
また、(安全面の配慮は大変ですが)実際に森に入り、手鋸で間伐を体験してもらっています。講師が木にロープをかけ受け口を作るまでの準備をし、児童が追いつきを切りながら、残りのみんなでロープを引きます。子どもたちにとって手鋸

を挽くのは重労働で、途中交代しながら協力してやると木が倒れた時の達成感は大きいです。木の力強さ、手入れされた森の心地よさを子どもたちが五感で感じられる良い機会なので、今後も取り組みを続けていきます。

つながりを広げる

しかし、全国的な林業界の諸問題は、当会の活動にも影響を及ぼしています。

主伐・再造林が進まないことで活動に適した若齢の山林を確保することが年々難しくなっているのに加え、会員の高齢化が進み、マンパワー不足になることが予想されます。

く、話を進めても人事異動などで頓挫してしまうことが危惧されます。そのため、長期的な予算確保や学校側の受入体制整備にも課題があります。

当会の活動を将来につなげていき、地域林業の活性化を図るためにも、若い世代の林業者や、学校行政ほか各種団体、地域を巻き込み、活動の輪を広げていきたいです。



原木の値段予想



事

私たちの実践

例

盆栽で樹木の生理を学び、 林業に生かす

金沢市林業研究会「石川県」／紙谷拓志さん



左から1、2、3、6年生の真柏



約40年生の真柏(しんぱく:ミヤマビャクシン)

幼少時に植物に魅了され 現在の仕事に

金沢市林業研究会(以下「本会」)は会員12名で、会員の多くが勤務する金沢森林組合の業務のサポートが活動のメインとなっています。金沢森林組合は園芸花木・庭木の販売からキャンプ場の管理まで幅広い業務を行っており、組合職員のスキルアップを図るため、本会会員が得意分野で講師を担当する勉強会の定期的な開催などをしてきました(現在は休止中)。

植物を扱う仕事に携わりたという思いから、私は平成18年に岩手大学農学部を卒業後、金沢森林組合に就職しました。最初に配属された緑化木センターでは、果樹苗の販売や造園庭木の販売、剪定

草刈り、雪つりなどを行い、現在は森林整備のプランナー業務をしています。金沢森林組合への就職をきっかけに本会の活動に参加するようになり、前述の勉強会では樹木の管理を担当してきました。今38歳ですが、金沢城公園の近くに自宅があり、飛んできた種が自宅の庭で芽生えるような環境だったので、子ども頃から自然に生えた苗を掘り取って植替えする遊びが高じて盆栽が趣味となり、30年目になります。

盆栽で学ぶ樹木の生理

盆栽を育てていると、樹木の生理状態について深く学ぶことがで



30年間手入れしてきた盆栽の数々

き、林業に役立つことが多々あります。作業道の開設個所を選定する場合などは、どのような植物が生えているかを見て地下土壌の状態を知ることができます。

例えば、コナラの盆栽を育てていると、乾燥に極端に強い植物であると気づきます。水やりを2、3日忘れても平気です。最悪、落葉してもまた芽が出てきます。こ



林研での盆栽づくり



真柏を挿し木で増やす



針金をかけて曲げたコナラ



幹曲げを行ったクヌギ苗

の性質ゆえ、山の尾根部で乾燥している場所が成育適地であると、実際に育てていると分かるのです。

コナラが生えるのは、表層土が少なく土壌水分が少ない場所で、水が集まりにくい環境であるため

生存競争に勝って生えている、と言えます。作業道選定の視点で見ると「開設するのに安全な場所」です。尾根上部から斜面を下ると次第にシデノキやホオノキが生えてきますが、シデノキは盆栽の呼名ではソロとい、水切れが起こりやすく葉焼けしやすい樹種として知られています。土壌水分が集まりやすい地形や、地山が崩落して堆積土壌になって水分が多く含まれる場所に生えるので、「崩落土壌のため

盛土が効かず、腐植が溜って土が黒色となっている、開設に注意すべき箇所」と認識することができます。

このように、自分で育ててみるとその樹木の性質がよく理解できます。また、施業方法などを人に説明する際にも、樹木生理の話をするとな得してもらい

です。尾根上部から斜面を下ると次第にシデノキやホオノキが生えてきますが、シデノキは盆栽の呼名ではソロとい、水切れが起こりやすく葉焼けしやすい樹種として知られています。土壌水分が集まりやすい地形や、地山が崩落して堆積土壌になって水分が多く含まれる場所に生えるので、「崩落土壌のため盛土が効かず、腐植が溜って土が黒色となっている、開設に注意すべき箇所」と認識することができます。

このように、自分で育ててみるとその樹木の性質がよく理解できます。また、施業方法などを人に説明する際にも、樹木生理の話をするとな得してもらい

やすいです。本会でも、樹木生理を理解し、地上部と地下部の関係を学ぶために、コナラとクヌギの実生苗を幹曲げし、盆栽にする研修会を令和元年8月に開催しました。



金沢森林組合では森林整備事業に従事

知見を深めて活用する

植物生理に詳しくなれば応用が利き、施業にかかわる判断力も養われると思います。今後も林業試験場や樹木医の方による講習等を積極的に受講し、知見を深め、業務や本会の活動に活用していきたいです。

*まとめ
紙谷 拓志

事

私たちのチャレンジ！

例

「お試し林研」で仲間を増やす 〜未来から今何をすべきかを見つめる〜

群馬県林業研究グループ連絡協議会「群馬県」

次世代の後継者を！

群馬県林業研究グループ連絡協議会（以下「群馬県林研」）は、県内20の林業研究グループ（以下「林業研究会」）より組織され、次世代の後継者を育成する大切な役割を担っています。

現在、ICTを利用したスマート林業が叫ばれる中、保育の段階から本格的な収穫期また再造林の移行期であり、従来のような林業研究会の在り方だけではICT化や次世代を担う人材の確保・林研加入を促進することが難しい状況になっています。

社会的な要望もSDGsやソサエティ5・0（内閣府が提唱する日本が目指すべき未来社会の姿）、また、政策としてデジタル田園都

市構想が立ち上がる中、新しいマインドリセットも必要な時代を迎えています。

「お試し林研」の立ち上げ

群馬県林研では数年前から「お試し林研」という林業研究会を立ち上げています。読んで字のごとく、すでに活動している個人・団体の方にお試し期間として群馬県林研に入ってくださいというものです。

お試し林研として入会中は、林業研究



「『創』美しいもり!!プロジェクト」でのドローン研修
(地域創生計画・桐生ドローン利活用協議会)



「『創』美しいもり!!プロジェクト」でのチェーンソー体験
(地域創生計画・日本伐木チャンピオンシップ経験者)



YouTubeで「群馬県林研」チャンネルを運営中です。
上の二次元バーコードからもアクセス可能。
どうぞご視聴ください

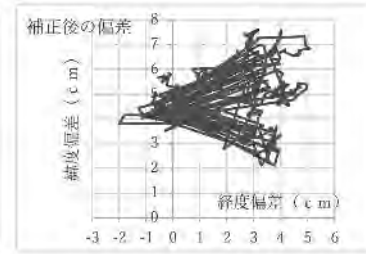


Fig.4 基準点の補正による偏差

「木の駅入口」が行う誤差1cm単位のGPS基礎研究

会の活動についてお会いして説明したり、資料をお送りしたりと、群馬県林研が積極的にサポートを行い、活動を応援します。このためコミュニケーションが取りやすく、連携が図りやすいというメリットがあります。

この取り組みは、平成29年よりスタートしました。

平成30年には●木の駅入口、●柚窓人、令和元年には●三波川さくらやま林研、令和2年には●NPO法人ロゴーズ、令和3年には●地域創生計画、●あかぎ団森づくりの会、の6団体がお試し林研から正規の林業研究会となり、群馬県林研に加入するという一つの流れが生まれてきています。

また皆さんの意見を伺い、必要



▲「NPO 法人ロゴーズ」理事長の今井陽樹さんは日本伐木チャンピオンシップで優勝（林野庁長官賞受賞）

◀同会員の横山大蔵さんは3位入賞

な際には丁寧に説明しながら調整に努力しています。

正規の林業研究会へ

お試し林研から新しい林業研究会となった皆さんは、活発に活動

しています。

「木の駅入口」はドローンや誤差1cm単位のGPS基礎研究等に力を入れています。

「NPO法人ロゴーズ」は、地域での伐木競技会事業を引き継ぎ、全国のチェーンソーマンの皆さんとの交流や技能の研さんに努めています。

また、「あかぎ団森づくりの会」も同事業で、インフルエンサーとしてパネルディスカッションのパネリストとして参加してもらっています。

さらに「NPO法人ロゴーズ」は、5月に

「地域創生計画」には、チェーンソーの安全やドローンを含む先進技術の面で、群馬県林研主催『創』美しいもり!!プロジェクト」を手伝ってもらいました。



「あかぎ団森づくりの会」は、群馬県林研主催「『創』美しいもり!!プロジェクト」にパネリストとして参加

林業研究会は「山と未来と仲間」と共にこれからも歩み続けることでしょう。群馬県林研ではこれからも、未来を創る人材発掘と定着に尽力していきます。

◆

まとめ
会長 小森谷孝志

行われたJLC（日本伐木チャンピオンシップ）において、活動の中で研さんを積んだ選手が決勝に進出し、素晴らしい成績を残されました。

事

私たちのチャレンジ！

例

所有者と協定を結び、 里山を再生

くらとみ
庫富林業グループ「北海道」

競走馬と日高昆布を
育むまち

日高町は、北海道の南西部に位置する温暖な気候の町で、日本を代表する競走馬の生産地であり、これまでたくさんの名馬を輩出しており、地元門別競馬場や全国の重賞レースで活躍しています。また、日高山脈の森林から運ばれる豊富な栄養源により、日高昆布を始め多くの魚介類が生まれ、私たちにおいしい海の幸を提供してくれています。



たくさんの名馬が日高町から生まれている



会員で作った炭窯。木炭は調理や融雪などに使った

所有者と協定を結び、 里山を再生

庫富林業グループは昭和38年に

結成され、59年間地域林業の先駆者として活動しています。長い歴史を持つ中で、近年力を入れてるのが平成27年から令和3年までの6年間取り組んだ事業です。地域の荒廃した里山林の再生のため、手入れが行われていなかった森林の所有者と「森林整備協定」を結び、森林整備から搬出材の活用までの一連の活動をグループで担いました。

締結したのは、学校法人八紘学園・北海道農業専門学校（本部：札幌）です。八紘学園は、畜産科が日高町にあり、120haの農地・施設とともに40haの森林を所有しています。この林分は、かつて牛の林内放牧地として利用され、その後、長年放置されていた70



クリやハルニレ、ミズナラの苗を育て、植樹祭に提供

80年生のカシワを中心とした天然広葉樹林です。まずは山林調査を行い、伐採・搬出する樹種・材積の決定、路網の整備と除間伐をし、伐採木を搬出しました。

作業を行った林地を振り返ると、手をかけた個所がはつきりと良くなっていることが実感でき、所有者にも喜んでいただけました。この森が今後どのように成長してい

作業前にみんなでそろって安全確認

くか楽しみです。

活動で一番気をつけていたことは、「けがをしない」ということです。林内にはツタウルシやさびた有刺鉄線などの障害物



間伐材の重要性を周知するパンフレットを作り、森林所有者に施業提案



会員の多くは森林所有者。互いの所有林を整備するなどして技術を学び合ってきた



多いときは年に14回の活動。4月の下見にはじまり、10月に現地作業を10回行った

等があることから、毎回その日一日の安全対策について話し合ってから作業を始めます。みんなで使用機械を点検し、グループで用意したおそろいの「チャップス」を着るなど、細心の注意を払い作業を行いました。また、間伐材を軽トラに積みこむと丸太の重さで車高が下がってしまうため、伐根に乗り上げて車を故障させてしまうなど多くの苦労がありました。けがもなく整備を終えることができました。会員の高齢化が進み、集まって話をする毎回のよう「さあ、これからどうする？」という話題が避けられない状況でしたが、今年、新たな会員が加わり平均年齢が「チョッピリ」下がりました。これからも、日高町や地元の林業普及指導員などの協力を受け、無理せ



搬出した間伐材は八鉦学園の札幌農場に運び、学生が薪材として販売した



新規会員の歓迎会。平均年齢が「チョッピリ」下がった

ず自分たちでできることを楽しみながら活動して行こうと話しています。

*まとめ

会長 藤本孝三



森林・林業を次世代に。 私たちの「ミスター林研」

日高川町林業研究会「和歌山県」／小早川眞さん

小早川眞さんとの 出会い

小早川眞さんは、長期にわたり和歌山県および日高地域の林研役員に就かれ多大な貢献と、私たちが会員に多くの教を残されました。小早川さんは令和3年に会長職を辞任し、令和4年6月に亡くなされました。その彼への思いを紹介させていただきます。

小早川さんとは、約40年前からの付き合いになります。私が初めて彼に出会ったのは市町村合併前の中津村林業研究会です。当時の会長から「若者がいないから入会してほしい」と誘われて入会したところ、当時の副会長であった彼と出会いました。第一印象は決して良いものではなく「横柄で気難

しい人、自分第一主義」という印象でした。それが時の流れの中でスルメをかむように私の中で味がでて「本来彼はピュアな心を持ち、真面目な人なんだ」という印象に変化していきました。

その後平成17年の市町村合併に伴い、中津村は日高川町となりました。町内にある美山村林業振興会・中津村林業研究会を再編して

新たに日高川町林業研究会として設立するため、尽力されたことも思い出されます。これに伴って小早川さんが会長に就任し、会員26名からの新たな出発となりました。私も、当時は日高川町役場林業振興課の職員として従事し、日高川町林業研究会を支援する立場として一翼を担いました。

日高川町林業研究会の 会長として

日高川町林業研究会では、「森林・林業を次世代につなぐ」という小早川さんの強い思いから、地域の森林所有者だけでなく、森林や林業に興味のある方や木工・木材製品に興味を持たれている方な



小学生を対象に「ウッドバーニング体験」を指導（平成27年）

どに幅広く会員募集の呼びかけをしてきました。その結果、森林組合の職員や緑の雇用のインターン生など若者の入会が実現しました。令和4年度からは若手会員の一人に副会長を担ってもらっています。若者の感性との融合によって、当会の活性化が促進されました。

日高川町林業研究会の活動を紹介するとともに小早川さんとのか



日高川町林業研究会設立総会にて演説する小早川さん（平成17年）



ウッドバーニング作品例展示(平成10年)

かわりを振り返りたいと思います。

① 森林・林業教室の実施

次世代を担う子供たちに、森林や林業についての学習と体験をする森林・林業教室を実施しています。小早川さんは、ほぼ全ての活動にボランティアで「語り部」として参画していました。

② 地域活動への取り組み

日高川町内で実施するイベント、農業祭、ふれあい祭、後の日高川フォレスト祭等に参加しています。特に主体的に取り組んでき

たのが「ウッドバーニング体験」というハンダゴテを小さくした電熱ペンで、木片の表面を焦がして絵や文字を描くものです。子供たちは木の感触を感じながら好きなものを描き、楽しんでいました。小早川さんは、私たち会員には

工具類に触れさせないほどの勢いで「ウッドバーニング体験」を主導していたことが印象的です。他にも、日高地域の小学生を対象にした「夏休み木づかいまつり」というイベントを開催しており、小早川さんは木工教室を主体に先頭に立って指導者として活躍されました。

③ 地域の森林と林業を守る取り組み

小早川さんは、日高川町林業研究会の最も重要な課題として、地域の林業と地域材の活用促進に関する意識醸成を挙げていました。山村住民の関心が失われつつある林業を守り育て、適切な森林整備が実施されるよう、「森林整備に関する研修会」のほか「木材加工施設(事業体)の視察」や「木工



小学生に間伐体験を行う若かりし小早川さん(平成3年)

教室」に取り組むことに重きを置いた活動に努めてきました。

意志を継ぎ、さらなる発展を目指す

小早川さんは会長を辞任するまで、半世紀あまり林業研究会の活動に貢献されました。その間、日高川町林業研究会の使命は、森林・林業が地域の生活から忘れ去られないよう、次世代を担う子供や若者たちに語り継ぐことだと私たち会員は教わりました。

近年力を入れていたのは、森林所有者への収益を増やせるよう、川上から川下に至る関係者との連携協力を発展させる取り組みです。川上では原木の生産、販売、再造



ふるさと祭で糸ノコ作業をする小早川さん(平成10年)

林における低コスト林業を推進し、川中・川下では原木の受給マッチングの促進に努めてきました。そのような中、小早川さんは今年(令和4年)6月に亡くなれました。残された現会員21名で小早川さんの意志を受け継ぎ、地域の森林・林業のさらなる発展を目指し、努力してまいります。

私たちにとって小早川さんは、「ミスター林研」そのものでした。ありがとうございました。

*まとめ

会長 中 敬男

事

私たちのチャレンジ!

例

きのこで森の循環を! オオイチヨウタケ栽培

盛岡広域森林組合青年部「岩手県」

地域の方々へ
森林・林業の
普及啓発を实践!

岩手県の県都・盛岡市を中心と
した7市町にまたがる地域を拠点

とする「盛岡広域森林組合青年部」

(部員23名)は、地域住民に森林
の大切さを知ってもらいたいとい
う理念のもと活動を行っています。

主に次のような活動を通じて、
幅広い年代の市民に対し森林・林

業の普及啓発に努めて
きました。

■スギのリース作り

↓ 市民活動のサ

ポート

■お山食堂 ↓ 子ど



スギ林床に発生したオオイチヨウタケ



収穫したオオイチヨウタケ。ひとつ50gほどもある



青年部の仲間(後列)と
お山食堂イベント参加者

もたち対象の森遊びのサポート
■森づくり ↓ きのこ栽培で森
の循環を目指す

スギ林で「きのこ」!?

植林したものの、手入れが行き届いていないスギ林は、今も多く存在します。

そうした中、平成28年に青年部員の一人「きのこ王子」こと高橋久祐氏が三重県で重宝されているという「きのこ」と出会いました。岩手ではニューフェイスのきのこ、大相撲力士の鬘（大銀杏）に似た大型の「オオイチョウタケ（キシメジ科）」です。

以後、岩手の冷涼な気候のもと、オオイチョウタケ栽培を行うことでスギ林の新たな有効活用を目指す「オオイチョウタケプロジェクト」が、「きのこ王子」を中心にスタートしました。

このプロジェクトは大きく分けて4つのアクションを行います。

①オオイチョウタケ栽培を普及することにより、森林所有者へ明るい話題を提供してスギ林の魅力や有効活用の幅を広げ、事業や雇用の創出を狙うこと。

②オオイチョウタケ栽培を通じて「きのこ」でSDGsをテーマに、森林環境教育の推進を図

り、そこで人と人との交流を促し、町と森との「ご縁」を広げること。

③オオイチョウタケを通じて「食」から森林資源の可能性を発信し、きのこを含めた「森の恵み」で食育の促進と健康づくりにつなげること。

④特産化を進め、きのこの「菌」で「お金」を生み、森林所有者やきのこ生産者へ利益を還元し、観光資源としても利益の増大を目指すこと。

この4つの「菌糸のつながり」を大切にしながら、社会的な「森の循環を広げる」ことを目指して取り組んでいます。

岩手のオオイチョウタケで一攫千金(菌)!!

冷涼な気候を活用した早期発生を促すことにより、特産林産物の端境期を狙った栽培計画のもと、生鮮出荷と乾燥物出荷の両輪で市場を開拓していこうと目論んでおり、現在、収穫5年目を迎えます。

収穫量はまだまだ多くはない

ですが、市内の料理店（イタリアン、フレンチ、和食等）にも出荷しています。香りや食感も良いことから評判が良く、手ごたえをつかんでいます。

オオイチョウタケは、生育場所の環境に大きく左右されますが、朝、親指大の大きさであっても昼過ぎにはあつという間に大きくなり、採取適期を逃してしまつたという失敗もありました。また、最近ではニホンシカやイノシシによる獣害も心配の種となっていますが、プロジェクトの成功に向け努力を重ねています。

新たなきのこ栽培活動を通じて森林の循環につながるよう、「菌糸の輪」を広げ続け、青年部ができることから、森林・林業界の一員としてSDGsの実現を意識した活動をしています。そして、きのこの「菌」から「一攫千金」を目指して、今後も「孢子活動」は続いていきます。

*まとめ

岩手県林業研究グループ

連絡協議会

事務局 佐々木光治



煮てよし、焼いてよし。オオイチョウタケはどんな料理にも合う



林内に菌床を埋め込んで栽培。菌糸が白く林床を這う。1年で1m伸長することも



卷末資料

林業で働くために

林業の仕事いろいろ

林業の仕事には大きく分けると、森林を植えて育てたり、木を伐る仕事を担う民間の林業会社、森林所有者を組合員として地域の森林経営を担う森林組合の2つがあり、木材産業では、木材を取り扱う原木市場や木材会社があります。最近では企業団体の先進化・多様化が進み、新しいスタイルを模索する林業の現場も増えてきています。

林業会社

森林所有者から立っている木を買って伐採して市場などに販売する形態が多いです。また、造林を専門に行う会社もあります。最近では、建設業から参入している会社も見られます。

森林組合

森林所有者を組合員とした協同組合です。森林がある全国のほとんどの地域をカバーしており、約600あります。

国や都道府県の森林林業関係の助成制度の受け皿として、地域の森林経営の推進役として様々な業務を担っています。

組合によっては森林作業班を独自に持ち、さらには原木市場や木材加工施設や販売施設を運営しているところもあり、その形態は様々です。

原木市場

林業会社や森林組合から集荷された木材の市を開催して製材工場などに販売しています。近年は山の現場から直接大型工場へ直送されるケースも増えてきたことから、木材の供給先と需要先を情報で繋ぐ新たな形態が期待されています。

木材会社

従来の丸太から板や柱を挽く製材工場、ラミナと呼ばれる木片から柱などを生産する集成材工場、丸太を剥いて重ねて板を生産する合板工場、柱材を建材に加工するプレカット工場などがあります。近年は大型化が進んでいます。一方、家具や小物をつくる会社も多くあります。

Q&A

Q 体力的な条件などはありますか？

A 林業機械の導入が比較的進み、男女の体力差が問われない作業環境になってきています。また森林施業プランナーなど比較的体力を重視しない職種もあります。

Q 危険な作業が多く、安全面で心配です。

A 安全を重視した林業技術を習得する研修制度があります。また、安全防護装備も近年急速に普及しています。機械の改良も進み安全に対する意識は高まっていますが、常に自分自身が安全への意識を持って仕事に取り組むことが大切です。

Q 女性の場合、トイレや着替えはどうしていますか？

A 移動式トイレを導入する会社もあります。また着替えについては移動中に公衆トイレなどへ立ち寄るなどの配慮をする会社もあるようです。

Q 女性特有の体調不良や産休・育休にも対応してくれますか？

A 会社ごとの判断になりますが、女性を採用する会社の多くはそうした配慮ができていところが多い傾向があります。会社を選ぶ際によく確認してみましょう。

林業で働くための方法

就職を希望しているなら…

■ 森林の仕事ガイダンス

森林の仕事ガイダンスは、新たな林業の担い手の確保・育成を目的に、森林・林業に関心を持つ方を対象に実施する説明・相談会です。会場には、参加都道府県の林業労働力確保支援センターや森林組合連合会が相談ブースを設け、各地の林業に関する情報、林業作業の内容や就業までの流れについての説明、参加者からの相談に応じます。



森林の仕事ガイダンス風景。写真は森林組合の林業現場で働く女性。このガイダンスで先輩の説明を聞いて東京から就業した女性もいます。

■ インターンシップ

地元の森林組合や林業会社で短期間のインターンシップを体験して、就業を決めるケースもあります。各都道府県の林業労働力確保支援センターにお問い合わせ下さい。

もっと林業を学んでから就職を考えたいなら…

■ 林業大学校等への進学

近年、林業就業者の育成を目的とした林業大学校等（教育・研修機関）の設立が相次いでいます。多くが1年制あるいは2年制で、高校卒業を入学資格としている例が多いようです。2022年末時点で、24校となっており、さらなる新設が予定されています。林業大学校等は都道府県等が設置・運営している学校です。また4年制大学への編入受験資格の取得が可能な学校もあります（専修学校）。

10～20名程度を定員としているところが多く、実習に力を入れており、森林・林業に関する様々な資格取得が可能です。卒業後は林業現場の即戦力として活躍している若者が全国で増えています。

■ 大学への進学

森林・林業に関する学科・科目がある大学は、2022年末時点で全国に33校あります。森林科学科や生物環境科学科など学科の名称は大学によって様々で、各大学の地域性や伝統など、その大学ならではの強みや個性が見られます。大学で学んだ知見を生かし、卒業して林業の仕事に就く若者も少なくありません。



森林・林業に関する学科・科目設置校一覧表（林業大学校・短期大学等）

令和4年4月現在

都道府県	学校名	郵便番号	所在地	電話番号	修学・ 研修期間	該当学科等
北海道	北海道立北の森づくり専門学院	078-8381	旭川市西神楽1線10号	0166-75-6161	2年制	林業・ 木材産業学科
青森	青い森林業アカデミー	039-3321	東津軽郡平内町大字小湊字新道46-56 (青森県産業技術センター林業研究所研修棟)	017-763-4022	1年制	
岩手	いわて林業アカデミー	028-3623	紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560-11	019-697-1536	1年制	
秋田	秋田県林業研究研修センター (愛称:秋田林業大学校)	019-2611	秋田市河辺戸島字戸尻台47-2	018-882-4512	2年制	秋田県林業 トップランナー 養成研修
山形	山形県立農林大学校	996-0052	新庄市大字角沢1366	0233-22-1527	2年制	林業経営学科
福島	林業アカデミーふくしま	963-0012	郡山市安積町成田字西島坂1 (福島県林業研究センター)	024-945-5974	1年制	就業前長期研修 短期研修
群馬	群馬県立農林大学校	370-3105	高崎市箕郷町西明屋1005	027-371-3244	2年制	農林業 ビジネス学科 (森林コース)
福井	ふくい林業カレッジ	918-8567	福井市江端町20-1	0776-38-0345	1年制 3ヵ月	長期コース 短期コース
山梨	専門学校山梨県立農林大学校	400-0502	南巨摩郡富士川町最勝寺2290-1	0556-42-7080	2年制	養成科森林学科
長野	長野県林業大学校	397-0002	木曾郡木曾町新開4385-1	0264-23-2321	2年制	林学科
岐阜	岐阜県立森林文化アカデミー	501-3714	美濃市曾代88	0575-35-2525	2年制	森と木の クリエーター科 森と木の エンジニア科
静岡	静岡県立農林環境専門職大学 短期大学部	438-0803	磐田市富丘678-1	0538-31-7901	2年制	生産科学科 林業コース
京都	京都府立林業大学校	629-1121	船井郡京丹波町本庄土屋1番地	0771-84-2401	2年制	森林林業科
兵庫	兵庫県立森林大学校	671-4142	宍粟市一宮町能倉772-1	0790-72-2700	2年制	専攻科
奈良	奈良県フォレスターアカデミー	639-3113	吉野郡吉野町飯貝680	0746-42-8100	2年制 1年制	フォレスター学科 森林作業員学科
和歌山	和歌山県農林大学校	649-2103	西牟婁郡上富田町生馬1504-1	0739-47-4141	1年制	林業研修部 (林業経営 コース)
鳥取	日南町立にちなん中国山地 林業アカデミー	689-5224	日野郡日南町多里782-2	0859-84-0070	1年制	林業専修科
島根	島根県立農林大学校	690-3405	飯石郡飯南町上来島1207 島根県中山間地域研究センター内	0854-76-2100	2年制	林業科
徳島	とくしま林業アカデミー	770-0045	徳島市南庄町5丁目1-9	088-635-7812	1年制	
愛媛	南予森林アカデミー	798-1351	北宇和郡鬼北町大字奈良4073-7 一般社団法人南予森林管理推進センター	0895-49-5083	1年制	
高知	高知県立林業大学校	782-0078	香美市土佐山田町大平80	0887-52-0784	1年制	基礎課程 短期課程 専攻課程
熊本	くまもと林業大学校	862-8570	熊本市中央区水前寺6丁目18-1	096-333-2444	1年制	長期課程
大分	おおいた林業アカデミー	879-5114	由布市湯布院町大字川北899-91 大分県林業研修所	0977-85-2488	1年制	
宮崎	みやざき林業大学校	883-1101	東臼杵郡美郷町西郷田代1561-1 宮崎県林業技術センター	0982-66-2888	1年制	

注：学校教育法に基づく専修学校や短期大学（専門職短期大学を含む）、道府県の条例に基づく研修機関等のうち、修学・研修期間が1～2年間で、年間を通じておおむね1,200時間以上の履修時間を設けており、森林・林業を担う人材の育成等を目的とする学校等を掲載。

参考：林野庁HP

令和4年度 未来の林業を支える林業後継者養成事業 実施グループ一覧①

グループ名	活動内容	対象学校
北海道 北海道林業グループ協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	岩見沢農業高校・旭川農業高校・帯広農業高校
宮城県 仙南フォレストクラブ	高校生等の林業就業促進現地活動	柴田農林高校ほか
★津山町林業研究会（8頁）	高校生等の林業就業促進現地活動	古川工業高校
秋田県 北秋田森林・林業振興会	高校生等の林業就業促進現地活動	秋田北鷹高校
福島県 福島県林研グループ連絡協議会	林業グループの林業振興活動支援	
館岩グリーンフォレスト	林業グループの林業振興活動支援	
茨城県 茨城県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	大子清流高校
栃木県 ★栃木県林業振興協会（12頁）	高校生等の林業就業促進現地活動、林業グループの林業振興活動支援	高校生等
群馬県 群馬県林業研究グループ連絡協議会	社会人等のインターンシップ	
NPO法人ロガーズ	林業グループの林業振興活動支援	
埼玉県 ★埼玉県森林協会 林業研究グループ部会（16頁）	高校生等の林業就業促進現地活動	秩父農工科学高校
東京都 特定非営利法人青梅林業研究グループ	高校生等の林業就業促進現地活動	多摩工業高校
神奈川県 なかい里山研究会	林業グループの林業振興活動支援	
富山県 富山県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	高校生等
山梨県 山梨県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	山梨県立農林高校
長野県 長野県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	県下全高校
南信州林業研究会	高校生等の林業就業促進現地活動	下伊那農業高校
木曽林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	木曽青峰高校・県林業大学校
長野市中条地区林業研究グループ	高校生等の林業就業促進現地活動	長野西高校中条校
★北信州の森林と家をつなぐ会（20頁）	高校生等の林業就業促進現地活動	下高井農林高校
四賀林研グループ	林業グループの林業振興活動支援	
岐阜県 加子母優良材生産クラブ	高校生等の林業就業促進現地活動	県森林文化アカデミー
高根林業改良クラブ	高校生等の林業就業促進現地活動	飛騨高山高校
付知町優良材生産研究会	林業グループの林業振興活動支援	
愛知県 愛知県森林協会林業研究グループ分科会	高校生等の林業就業促進現地活動	森林・林業関係高校等
愛知県指導林家連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	森林・林業関係高校等
額田林業クラブ	林業グループの林業振興活動支援	

★は、本情報集第1部で紹介しているグループ。グループ名の下に数字は紹介頁をさす。

令和4年度 未来の林業を支える林業後継者養成事業 実施グループ一覧②

グループ名	活動内容	対象学校
三重県 ★熊野林星会（24頁） 松坂林業研究会	高校生等の林業就業促進現地活動 林業グループの林業振興活動支援	紀南高校
京都府 京都府林業研究グループ連絡協議会 樹々の会	高校生等の林業就業促進現地活動 林業グループの林業振興活動支援	北桑田高校
和歌山県 和歌山県林業研究グループ連絡協議会 女性林研部会	高校生等の林業就業促進現地活動 林業グループの林業振興活動支援	りら創造芸術高校・南部高校龍神分校ほか
島根県 特定非営利活動法人もりふれ倶楽部	社会人等のインターンシップ、林業グループの林業振興活動支援	
岡山県 岡山林業未来会	林業グループの林業振興活動支援	
広島県 ひろしま森林施業プランナー会	林業グループの林業振興活動支援	
山口県 ★山口県林業研究グループ連絡協議会（28頁）	高校生等の林業就業促進現地活動、林業グループの林業振興活動支援	山口農業高校・萩商工高校・大津緑洋高校
徳島県 ★かみやま林業振興会（32頁）	高校生等の林業就業促進現地活動	城西高校神山村
愛媛県 愛媛県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動、林業グループの林業振興活動支援	西条農業高校・伊予農業高校・上浮穴高校・北宇和高校
福岡県 黒木町林業振興会	高校生等の林業就業促進現地活動	八女農業高校
熊本県 ★京都森林研究グループ（36頁） 上益城地区林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	行橋高校
八代地域林業研究・普及連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	矢部高校
★芦北地域林業研究グループ（40頁）	高校生等の林業就業促進現地活動	八代農業高校泉分校
球磨地区普及・林研グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	芦北高校
大分県 大分県林研グループ連合会	高校生等の林業就業促進現地活動	南陵高校
宮崎県 ★門川町林業研究グループ連絡協議会（44頁）	高校生等の林業就業促進現地活動	大学生
鹿児島県 鹿児島県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進現地活動	門川高校
錫山センリョウグループ	林業グループの林業振興活動支援	伊佐農林高校

★は、本情報集第1部で紹介しているグループ。グループ名下の数字は紹介頁をさす。

全国林業研究グループ連絡協議会 事務局一覧

全国林業研究グループ連絡協議会は、46都道府県の実業研究グループ連絡協議会（一部名称が異なる）を会員とし、傘下には森林所有者および林業に従事する者等を構成員として、森林づくり、人づくり、地域づくりを担っている自主的なグループです。

名 称	郵便番号	住 所	電話番号
全国林業研究グループ連絡協議会	100-0014	東京都千代田区永田町 1-11-30 サウスヒル永田町 5F	03-3500-5035
北海道林業グループ協議会	060-0004	札幌市中央区北 4 条西 5 丁目 林業会館内	011-261-9022
青森県林業研究グループ連絡協議会	039-1528	三戸郡五戸町大字浅水字陣場 92-2 三八地方森林組合内	0178-67-2003
岩手県林業研究グループ連絡協議会	028-3623	紫波郡矢巾町大字煙山 3-560-11 県林業技術センター内	019-698-1337
宮城県林業研究会連絡協議会	981-3602	黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14-1 県林業技術総合センター内	022-345-2887
(一社) 秋田県森と水の協会 林業後継者部会	010-0941	秋田市川尻町字大川反 170-169 森林環境会館内	018-883-1252
山形県林業グループ連絡協議会	990-2473	山形市松栄 1-5-41 山形県森林協会内	023-666-4331
福島県林研グループ連絡協議会	960-8043	福島市中町 5-18 林業会館内	024-521-3245
茨城県林業研究グループ連絡協議会	311-0122	那珂市戸 4692 県林業技術センター内	029-295-7318
栃木県林業振興協会	320-8501	宇都宮市塚田 1-1-20 県林業木材産業課内	028-623-3273
群馬県林業研究グループ連絡協議会	371-0854	前橋市大渡町 1-10-7 群馬県公社総合ビル 6F	027-280-6259
埼玉県森林協会の林業研究グループ部会	357-0212	飯能市井上 138 木楽里内	042-970-2007
千葉県林業研究グループ連絡協議会	270-1362	印西市亀成 161	0476-42-2210
東京都林業研究グループ連絡協議会	190-0181	西多摩郡日の出町大久野 7852 東京都森林協会内	042-597-2881
神奈川県林業研究グループ連絡協議会	243-0018	厚木市中町 2-13-14 サンシャインビル 604 神奈川県森林協会内	046-240-0500
新潟県林業研究会連絡協議会	950-8570	新潟市中央区新光町 4-1 県林政課経営指導係内	025-280-5326
富山県林業研究グループ協議会	930-0004	富山市桜橋通り 5-13 富山興銀ビル 4 階 県森林政策課内	076-444-3387
石川県林業研究グループ連絡協議会	929-0325	河北郡津幡町字加賀爪 1 湊端良子様方	076-254-5337
福井県山林協会普及部会林研分科会	910-0003	福井市松本 3 丁目 16-10 福井県職員会館ビル 2F	0776-23-3753
山梨県林業研究グループ連絡協議会	409-2734	南巨摩郡早川町雨畑 1 (早川町森林組合内)	0556-20-5100
長野県林業研究グループ連絡協議会	380-0936	長野市岡田町 30-16 林業センター (一社) 長野県林業普及協会内	026-226-5620
岐阜県林業グループ連絡協議会	501-3714	美濃市曾代 88 県立森林文化アカデミー内	0575-35-2535
静岡県林業研究グループ連絡協議会	420-8601	静岡市葵区追手町 9 番 6 号 県庁西館 9 階 (公社) 静岡県山林協会内	054-255-4488
愛知県森林協会の林業研究グループ分科会	460-0001	名古屋市中区丸の内 3-5-16 愛知県林業会館内	052-961-9730
三重県林業研究グループ連絡協議会	514-0003	津市桜橋 1 丁目 104 番地 (林業会館) 林業技術普及協会内	059-228-0924
滋賀県林業研究グループ連絡協議会	520-2144	大津市大萱 4 丁目 17 番 30 号 林業協会内	077-599-4572
京都府林業研究グループ連絡協議会	604-8424	京都市中京区西ノ京樋ノ口町 123 京都府森林組合連合会内	075-841-1030
大阪府		(事務局なし)	
兵庫県林業研究グループ連絡協議会	671-2515	宍粟市山崎町五十波 430 森林林業技術センター内	0790-62-2118
奈良県林業研究グループ連絡協議会	636-0202	磯城郡川西町結崎 862-29 衣田雅人 様方	0745-43-1327
和歌山県林業研究グループ連絡協議会	640-8585	和歌山市小松原通 1-1 和歌山県庁林業振興課内	073-441-2960
鳥取県林業研究グループ連絡協議会	680-0411	八頭郡八頭町船岡殿 539	0858-72-1140
島根県林業研究グループ連絡協議会	690-8501	松江市殿町 1 番地 県農林水産部林業課内	0852-22-5153
岡山県林業研究グループ連絡協議会	700-8570	岡山市北区内山下 2-4-6 県林政課内	086-226-7451
広島県林業研究グループ連絡協議会	730-8511	広島市中区基町 10-52 県農林水産局林業課内	082-513-4840
山口県林業研究グループ連絡協議会	753-8501	山口市滝町 1 - 1 県森林企画課内	083-933-3460
徳島県林業研究グループ連絡協議会	771-0134	徳島市川内町平石住吉 209-5 (公社) 徳島森林づくり推進機構内	088-679-4103
香川県林業普及協会	760-0008	高松市中野町 23-2 香川県森林組合連合会内	090-7626-1788
愛媛県林業研究グループ連絡協議会	791-1205	上浮穴郡久万高原町菅生二番耕地 280-38 県林業研究センター内	0892-21-2266
高知県林業研究グループ連絡協議会	783-0055	南国市双葉台 7 番地 1 高知県森林組合連合会内	088-855-7050
福岡県林業研究グループ連合会	839-0827	久留米市山本町豊田 1438-2 県資源活用研究センター内	0942-45-7868
佐賀県林業研究グループ連絡協議会	840-0212	佐賀市大和町大字池上 3408 林業試験場	0952-62-0054
長崎県林業研究グループ連絡協議会	854-0063	諫早市貝津町 1122 番地 6 林業会館内	0957-25-0177
熊本県林業研究グループ連絡協議会	862-8570	熊本市中央区水前寺 6 丁目 18-1 県森林整備課内	096-333-2441
大分県林研グループ連合会	870-8501	大分市大手町 3-1-1 県林務管理課内	097-506-3823
宮崎県林業研究グループ連絡協議会	880-8501	宮崎市橋通東 2 丁目 10 番 1 号 県森林経営課内	0985-26-7154
鹿児島県林業研究グループ連絡協議会	892-0816	鹿児島市山下町 9-15 鹿児島県林業改良普及協会内	099-223-8550
沖縄県林業研究グループ連絡協議会	900-8570	那覇市泉崎 1-2-2 県森林管理課内	098-866-2295

編集スタッフ—————岩渕 光則
齊藤 恵巳
石井 圭子
緒方美英子
高橋 香織
吉田 憲恵

レイアウト—————森本 唯

装丁—————クリエイティブ・コンセプト（根本 眞一）

仕事を学ぶ 林業をつなぐ 未来の担い手を育てよう 林業就業促進活動事例集

発行—————令和5年3月15日

発行者—————齋藤 正

発行所—————全国林業研究グループ連絡協議会(全林研)
〒100-0014 東京都千代田区永田町 1-11-30 サウスヒル永田町 5F
電話 03-3500-5035
FAX 03-3500-5038
webサイト ringyou.or.jp/rinken

編集—————全国林業改良普及協会

印刷・製本所—————株式会社丸井工文社

本冊子は、林野庁「令和4年度未来の林業を支える林業後継者養成事業」を活用して作成しています。

Printed in Japan

- 本書に掲載される本文、写真のいっさいの無断複写・引用・転載を禁じます。
- 著者、発行所に無断で転載・複写しますと、著者および発行所の権利侵害となります。



本冊子は、林野庁「令和4年度未来の林業を支える林業後継者養成事業」を活用して作成しています。